

第23回SGRAフォーラム

日本人と宗教：  
宗教って何なの？



## ■ フォーラムの趣旨

多くの日本人にとって宗教とは何か理解しにくい。イスラーム過激派によるテロ事件が起き、ますますその思いはつもの。日本人は「無宗教」と言われるが、では何も信じていないのか。外国で「無宗教」と言うと野蛮人のように見られる。宗教がないと社会に秩序がなくなると言われる。しかし、日本ほど規範意識が高く、秩序を尊ぶ社会も少ないのではないか。神道では、木や山や川や海、どこにでも神がいる、死んだ人は皆神様になるから祖先をお祀りすると言うと、原始的な信仰のように思われる。初詣を神社（神道）で、結婚式を教会（キリスト教）で、葬式をお寺（仏教）で行うのはおかしい？宗教が暴力的な対立を容認する現代において、多様な宗教が混在する日本から何か発信できるのか。一方、創価学会・立正佼成会を初めとする新宗教の興隆も、現代の日本人と宗教を考える時に無視できない。オウム真理教の起こした事件は、私たちに何を問いかけているのか。

新しいSGRA「宗教と現代社会」研究チームが担当する最初のフォーラムでは、日本で宗教の研究をする日本人や外国人の学者の方々をお招きして、このような疑問に率直に答えていただきます。

### ■ SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。

## プログラム

### 第23回SGRAフォーラム

# 日本人と宗教：宗教って何なの？

日時： 2006年5月14日（日）  
午後2時より5時30分まで  
終了後懇親会

会場： 東京国際フォーラム ガラス棟610会議室

2時00分

## 開会挨拶

今西 淳子（SGRA代表）

総司会：M. マキト（SGRA運営委員）

2時10分

基調講演

## 日本人にとっての「宗教」と「宗教のようなもの」

島菌 進（東京大学教授）

「宗教」というとアレルギーを起こしたり、無関心になったりする日本人は多い。しかし、「宗教のようなもの」と話を広げてみるとどうだろうか。たとえば「道」である。茶道、華道などの芸道、剣道、弓道などの武道。最近は武士道がリバイバルだ。神道にも「道」の文字が含まれている。教育勅語も人としての「道」を説くものだった。また、近年は「霊性」とか「スピリチュアリティ」、また「精神世界」や「アニミズム」も人気がある語だ。これらを考え合わせて、日本人にとっての「宗教」の意義を考えたい。

2時50分

パネリスト自己紹介

## 日本と宗教と私

- 日本と神道  
ノルマン・ヘイヴンズ（國學院大學神道文化学部助教授）
- 日本と仏教  
ランジャン・ムコパディヤヤ  
（名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授、SGRA研究員）
- 日本とキリスト教  
ミラ・ゾンターク（富坂キリスト教センター研究主事、SGRA研究員）
- 日本とイスラーム教  
セリム・ユジェル・ギュレチ（イスラーム文化センター事務総長）

3時30分

## 休憩

3時50分

パネルディスカッション

## 日本人と宗教

5時30分

## 閉会挨拶

嶋津忠廣（SGRA運営委員長）

その後、地下1階ロイヤル・カフェテリアにて懇親会

## 基調講演

## 日本人にとっての「宗教」と「宗教のようなもの」

島 蘭 進

東京大学教授

皆さんこんにちは。

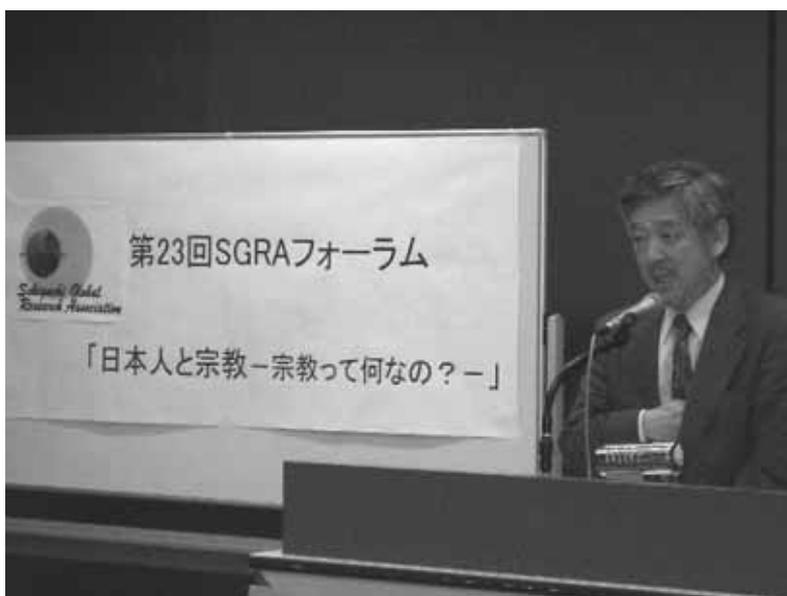
私が宗教学を勉強することになってから、既に三十数年間が過ぎています。今日は、なぜ、自分は宗教学という道に入り込んでしまったのだろうかということからお話したいと思います。

私の父は精神科の医者でした。そして、祖父も医者で、伯父も医者です。私の家系には医者が多かったのです。先祖のことは分からないのですが、「なぜ、医者をしていたのか」と聞くと、父は「人助けをしたい」と言っていました。10年くらい前に白血病を患って亡くなりました。晩年、病気に苦しみながらも、自分は「やりたいことをやって死ぬる」と言っていました。その時、「自分のモットーは『人のために働く』ということだが、それは達成した」と言っていました。

精神科医といっても、いろいろなやり方があります。最近は自然科学を多く取り入れ、生物学に基づ

き薬で治療することが多く、普通の医者と余り違いがなくなっています。中には、難しいことを言う方がいて、哲学的な精神医学、あるいは精神分析という方法を使う方もあります。父は、人間を深く観察するというよりも、何か精神状態が悪いというのは生理学的な問題があるのだという方向で研究していました。ですから、科学で人を救うということになるとと思います。父はそのような人で、私の名前は「進」というのですが、1948年にこの名前をもらいました。日本が戦争に負けまして、天皇陛下は「日本は科学がだめだったのだ」と言ったと言われています。あの時代は、日本人が一番科学を信じていた時代かもしれないと思います。

私も20歳くらいまでは医者になるつもりでいました。しかし、学生時代に「自分は何のために生きているのだろう」とか、「何のために勉強しているのだろう」というのが非常に深い疑問になってしまいました。取り分け大学に入るときに受験勉強を



しますが、それを何のためにやるのか、そしてその間に自分の人生のコースが決まっていくのですが、それについて自分は何も考えていないということが非常に不安になり、落ち込みました。ちょうど大学紛争があった頃で、学生同士が殴り合ったりした大変難しい時期で、大学を辞めていく人や自殺する人たちを見ながら、このまままっすぐ行くというのは何か変だなと思って迷いました。

そのときになぜ宗教学に行ったのか。医学部に行くつもりだったのですが、文学部に移ろうと思いはじめました。自分の生き方を考えるのは、普通は哲学とか文学の領域かもしれませんが、もっと普通の人々が普通に生きていることの中から考えたいと思いました。それで研究を始めました。

私の母親はカトリックのミッションスクールを出ました。そして母親の家は神道でした。高知県の出身でした。明治維新のとき、高知県は国学という仏教をやめて「神道に返ろう」という復古神道の運動が強かったのです。神道のお葬式に皆さんは出たことがありますか、外国人の方は少ないでしょう。國學院大学のヘィヴンズさんはよく知っていると思います。なかなか素晴らしいです。普通は仏教でお葬式をするのでお経を聞きますが、お経というのは聞いてもよく分かりません。だんだん年を取ってくると分からないのいいなと思うようになってきますが、若いときはお焼香をするといっても上手くできなくて気になりました。それに比べて、神道は非常にシンプルです。普通二拍の拍手をしますが、人が亡くなったときは音が出ないようにします。それから、しのびごとといって祝詞のようなものをあげるのですが、これは聞いていて意味が分かります。そして、その亡くなった方の人生を淡々と話されるのです。故人のことをよく分かった方がしのびごとを話されると、その人の人生を辿ってきて、このようにして亡くなったのかということが本当に納得できるようなお葬式の雰囲気があります。この限りでは、私は神道に共鳴しています。

それから、父親の方は浄土宗の家の出身です。先

ほど言いましたように人助けというようなことを父が言ったのは、もしかするとそのおばあさんが大変熱心な仏教徒だったからかもしれません。「なんとか人のためになるようなことをしたい」といつも言っていました。そういうことがどこかで影響しているのではないかと思うことがあります。仏教の慈悲の考え方が伝わったのではないかと思うのです。

それから、私はプロテスタントの幼稚園に行きました。幼稚園の先生が「お祈りをしなさい」と言いました。それで、今でも覚えているのですが、火事があつたり、強盗があつたりして、怖くて怖くてしょうがない時には、畳んだ布団の所でよくお祈りをしていました。

父が亡くなってから、隣に住んでいる母の様子を、できるだけ毎日見るようにしています。そこに父の位牌が置いてあるご仏壇がありますので挨拶に行きます。仏壇をほったらかしているのはよくないからです。この仏壇にある位牌というのは仏教の戒名が書いてありますが、元々は中国の儒教のものです。先祖を大事にするというのは仏教よりも儒教の方です。そのように考えると、私の中には、シンプルな自然との一体感を愛するような神道の考え方もありますが、人が苦しんでいる時には何かしてあげたいという大乘仏教の精神とか、キリスト教の精神から習ったものもあります。私の母はカトリックの学校に行きましたのでいろいろなことを知っているのですが、本人は決してカトリック信者にはなりません。しかし、私は、キリスト教に関連するいろいろなことを母から聞いています。そのようなことで私には、いろいろなものが入っています。宗教学を勉強することになったのも、そのようなことが関係しているのかなと思います。

私はあちこちで宗教のことを話しますが、「日本人の宗教」がテーマのときには、＜私はこういう人間です＞＜日本人はこういう人間がわりと多いです＞と話すことにしています。私にとっては、それが＜自分を通して考える宗教＞というものなのです。それでは＜私は無宗教なのでしょうか＞とお尋

ねしてみたい。

1996年に明治学院大学の阿満利磨先生が、『日本人はなぜ無宗教なのか』という本を筑摩新書から出しました。この本はよく売れました。りっぱな本だと思います。英語にもなりましたし韓国語にもなりました。阿満先生はどういうことを言っているかというと、日本人は無宗教と言われているけれども、それは「創唱宗教」と比較しているからではないか。創唱宗教は、特定の教祖がいて、しっかりとした教義を持っています。キリスト教にはイエス・キリストがいますし、仏教にはゴータマ・ブッダがいますし、イスラムにはムハンマドがいます。このような宗教が「創唱宗教」です。しかし、ヒンズー教を始めた人はいません。神道にも始めた人はいません。また、民間信仰ももちろんだれが作ったということはありません。いわば無名の人たちによって自然に実践されてきたものです。

日本の宗教というのは、創唱宗教がたくさん入ってきて影響を受けました。主に仏教でしょうか、近年になるとキリスト教です。あるいは、神道の中にも創唱宗教になったものがあります。それは、たとえば中山みきという人が始めた天理教です。創唱宗教の影響もある程度はあるのですが、ベースは自然宗教だと阿満先生は説いています。広い意味で神道といえるかもしれないし、民間信仰といえるかもしれません。もし「無宗教」と言う言葉を使うならばこのような意味なのではないかと思います。まずは、自然宗教の影響があり、その後、創唱宗教の影響を受けたにもかかわらず、それがしっかりと根付いていない文化なので、強い創唱宗教に出会うと何か戸惑ってしまう。自分は創唱宗教にはなじめないと考えるようなところが基調にはある。これが1996年に出た、『日本人はなぜ無宗教なのか』という本です。

こういう本が売れた1つの理由には、この本が出た前の年に「オウム事件」があったからかもしれません。私のような大人にも「オウム事件」は非常にショックでした。子供もショックだったでしょう。当時の子供の方に聞いてみたいです。何がショック

だったかということ、なぜかなり高い教育を受けた非常に有能な若者がこれだけ引き付けられたのか。オウム真理教の特徴は20代の男性が非常に多く、その中に大学生や大学院生がたくさんいました。自然科学の人も多かったです。あるいは、踊りが上手だったり、コンピューターグラフィックが上手だったり、音楽が上手だったり、いろいろな特殊手技を持った人が多かったです。子供のころから訓練を受けて特殊能力を身に付け、さらにそれを発展させた人です。高級オタクと呼べるようなタイプの人が多かった。彼らはなぜオウムに向かったのか。それに代わるものが日本にはなかったのかという問いかけは非常に重いものでした。

単に<日本人の視野が混乱している>とか、<現代の若者はどうなっているのか>ということを超えて、<自分たちは宗教的な何かを持っているのか>、<彼らに何が提示できるのか>という問題があったと思います。例えば、<なぜ彼らは仏教教団に入らなかったのか>、<仏教には彼らを納得させるものがなかったのだろうか>というショックです。「オウムショック」というのはいろいろな意味が含まれていると思います。さらに、もう少し長いスパンで見ると、その後に「9・11」がありました。「9・11」も「オウム」も両方とも宗教テロという点でつながっています。

そのような流れで考えていくと、世界的に類似したことが起こっているともいえます。「オウム」は相当変なグループでしたが、「9・11」になるともっと世界的にしっかりとした足場のある何かから起こっているのです。しかし、そこでは何か心のよりどころを失っており、普通の人も持っている小さな混乱が、それでは収まらずに、目にみえて発展し、とんでもないことになって起こってくるように感じます。最近の日本のいろいろな事件、中学生が友達を殺すという事件を見ても同じことだと思います。その異常事態というのは、我々のように普通の生活を穏やかに暮らしているつもりの我々の中の混乱とも関係しているというように感じるかもしれません。「オウム事件」のときにはそのようなことがありました。

オウム後に、幾つか宗教論が出ました。橋本治さんという、私とほとんど同じころの東大にいて、全共闘で活躍したイラストレーターで、その後作家になった方は、『宗教なんかこわくない』という本を出して賞をもらいました。彼は、「もう宗教は終わったのだ」と言っています。オウムの事件を振り返って、「あのように宗教にのめり込むのはもうやめよう」ということです。そこに希望を持つということは何か大事なことが理解できていないのだという考えです。しかし、この本の中には、どこか宗教というのは怖いということが入っていないでしょうか。「宗教なんか恐くない」と言っているということは、どこかで本当は宗教が気になる、無視できないという気持ちが入っていると思います。

梅原猛先生と山折哲雄先生、日本文化研究の大御所の先生方お二人は『宗教の自殺』という本を出しました。派手な題のご本が多かったです。本というのは売るときには派手な題をつけなければいけないのですが、それにしても派手な題です。しかし、そのような内容が入っています。宗教の自殺だと。つまり、「オウム事件」というのは、宗教そのものが行くところまで行って、これでもうだめになったのだと、ちょっと言い過ぎですね。その代わり副題には「日本人の新しい信仰を求めて」と書いてあります。だから宗教は終わったけれど、何も無いというわけではない、やはり信仰が何か必要なのだと密かに書いてあります。オウムを生んだような日本の宗教の伝統はもうだめですが、しかし日本人が何も持っていないはずはないという考え方です。

もう1つ派手なのが、吉本隆明さんと芹沢俊介さんの『宗教の最後の姿』という本です。1995～1996年はこういう本がたくさん出ました。元々吉本隆明さんという人は、親鸞がとても好きな人です。親鸞は浄土真宗を始めた人ですが、彼は浄土真宗の親鸞解釈ではない自分独自の親鸞解釈、それは宗教を超えた宗教みたいなものなのだという考えを持っている人です。そのことを強く訴えています。

このような本を見ると、先ほど言ったような世界的にも似たような感じがあると思います。みんな宗

教というものの必要性をますます痛切に感じているのに、恐さや危険も同時に感じています。宗教を離れられないけれども、近づいていくこともできないという呪縛みたいなものです。しかし、それは日本の場合特に強いのではないだろうかと感じます。先ほど言った私のような経歴は、特定の創唱宗教にしっかりコミットした経験がないということですが、そのような人ばかりが周りに多いです。中にはもちろん熱心な人もいますが、大多数の人間が、世の中にはそのようなものがあるということは知っていて、大事なことを言っているというのは分かっている。そういうことを身に付けた方がしっかりと生き方が持てるというのは分かっているけれども、自分はそれとは違うという感じを持っている。こういうのが日本の1つの特徴だと思います。

自然宗教というのは、必ずしも昔のものではないということもあります。自然宗教というものがあり、それがもっと発達したのが創唱宗教だという考え方もあります。世界の文明はそっち方向で進んできたということです。自然宗教というのは、先住民の世界、仏教が入ってくる前の世界です。もちろん田舎に行くと自然宗教に基づいた文化はありますが、現代人としてそういうところに戻るのはどうなのかと思います。

1980年にオウムがマスコミで騒がれるようになる前、「アニミズム」という言葉が流行していました。神道というと何か日本のナショナリズムと結びついて外国人を排除するようなニュアンスがありますが、神道をアニミズムといたらどうでしょうか。日本という国家ができる前からあったものを「古神道」といいますが、自分の中に根付いているものはそのようなものではないかという言い方もされるようになりました。しかし、宗教学を勉強している人からいうと「そういうようなものも現代人が作ったものではないか」ということになります。現代人が自分に都合がいいようにそのように言っているのであって、本当に昔からあった田舎の人たちの宗教や縄文時代の人たちの宗教を我々がそのまま信じることはできないと感じます。

以上のように、無宗教とか自然宗教とかいうことで日本人の特徴を表す言い方がありますが、もう1つの考え方としては、この演題に出したように、日本人は「宗教」と言われると非常に困るけれど、「宗教のようなもの」にはいろいろな形で親しんでいるのではないかと思います。

幾つか例を持ってきたのですが、これは『バカボン』という漫画です。今まで聞いたことがある方はどのくらいいらっしゃいますか。これは井上雄彦という人の書いた漫画で、今22巻くらいまで出ていますが、3～4年か4～5年くらい前から出ていて、最も流行っている漫画の1つです。テーマは宮本武蔵です。江戸時代の初めのころの剣道の達人です。戦後に吉川英治という人が『宮本武蔵』という小説を書き大流行しました。その本を使って漫画にしたものです。これが大ヒットして、かなりの若者が読んでいます。今、手を挙げた人は若者ですね。手を挙げなかった人も若者だと思いますが。

なぜ、これが魅力なのかというと、1つにはこの主人公のバカボンというのは武士ですが、浪人ですから非常に自由なのです。ボヘミアンです。全く孤独です。自分の故郷を出て、全国を歩きながら戦って、あらゆる強い敵を見出して、その敵と戦って勝つというような一生です。そして、勝つ時はいつも命がけです。ですから、死というものを常に意識しているのです。非常に孤独で、少しニヒルで「なぜ勝たなければいけないのか」「なぜそんなに追っかけられたように敵と戦っているのか」ということがテーマになります。別に憎んでいるわけでもないけれども、勝つということが目的になっているという世界です。そのような世界が、現代人の心に非常に訴えるらしいです。

武士道という言葉がこの数年非常に流行っているのですが、その武士道は命を賭けて戦い、主君のためには命を投げ出してもかまわないという覚悟で毎日を生きているという世界です。死を意識するということが非常に重要な要素です。そのようなものに非常に引かれるのです。日本人の中には宗教というものには親しみはないけれども、「道」といわ

れるといろいろな形で関わってくる人が多いと思います。

宗教学科に進学している学生のかかなりの割合は芸術をやっています。音楽や芝居などです。また、武道をしている人も非常に多いです。合気道とか弓道とかです。私の今までの経験でいうと、高校や大学に入ってから武道に親しんで、武道で感じたものを深めたいということで宗教学科に入ってきたという人がかなりいるのではないかと思います。そのようなことを考えると私も大分残りが少なくなってきている人生ですが、もし暇になったら何かそういう技を磨きたいと思います。例えば陶芸をやる人が、焼き物を焼くことを通して何か自分の人生を振り返る、あるいは何かを極めたいと思う。日本にはそういうものがあります。つまり、偉大な宗教というものを極めようとするのではなくて、もっと身近な体とか「技」とかで「道」というものに結びついているのだと思います。具体的なものを通して極めることは、おそらく「美」に置き換えることができます。そういうものを通して精神的な価値を求めるということが、もう1つの特徴ではないかと思います。「宗教のようなもの」ということに、そういう意味を見いだされると思います。

以上は日本の傾向ですが、もしかして世界的にそういう傾向があるといってもいいのではないのでしょうか。つまり、日本から始まって世界に最も広まっているものは何でしょうか。1つはアニメだったり漫画だったりしますが、もう1つは実は武道です。どこへ行っても空手がない所はありません。たくさんの宗教にふれるけれども深くは入り込まない。そして宗教そのものよりアニメや技芸を通して宗教的なものに親しんではいる。そんな文化のあり方が世界へ広まっている面もある。そういうことを通して考えてみると、ある意味では現代人は幾分か日本人に近づいてきていると言ってもいいだろうと思います。

これから皆さんが日本人と宗教について、そして

宗教とは何だろうということ、日本人が見落としがちな観点をいろいろ指摘してくれるのを楽しみにしています。それでは、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

## パネリスト自己紹介

# 日本と宗教と私

- 日本と神道 ノルマン・ヘィヴンズ  
(國學院大學神道文化学部助教授)
- 日本と仏教 ランジャンナ・ムコパディヤーヤ  
(名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授、SGRA 研究員)
- 日本とキリスト教 ミラ・ゾンターク  
(富坂キリスト教センター研究主事、SGRA 研究員)
- 日本とイスラーム教 セリム・ユジェル・ギュレチ  
(イスラーム文化センター事務総長)

### ■私と神道と日本

ノルマン・ヘィヴンズ

(國學院大學神道文化学部助教授)

「日本と宗教と私」について話すように言われました。こういう三角関係は、つまり、私と宗教、私と日本、日本と宗教という3つの部分に分けることができると思いますが、10分では到底時間がないです。

私はアメリカ出身ですが、生まれた時から、保守的なキリスト教の教会の教えを受けて育ちました。それが唯一の真理だとして、私は小学校から大学2年生までその宗派の教えを学びました。島藺先生と共通点を1つ見つけたのですが、私も医者になろうと思ったのです(笑)。大学の2年生まで、医学予科で勉強していましたが、その後、ベトナム戦争の関係で海軍に入らなければならなくなりました。衛生兵として務めていましたが、その2年間は日本の沖縄に派遣されました。日本とは妙な縁がありました。高校時代から日本の詩、俳句、短歌、和歌に少し興味もっていたのですが、ちょうどそのころポータランドに日本の庭園が造られるようになり、日本

の美的感覚や美意識について強い関心を持つようになりました。そこで沖縄では日本語を本格的に勉強することになり、そこで私と日本と、私と宗教の関係がちょっと絡み合い、1つのことに目覚めました。

ここでちょっと難しい言葉を出しますが、ロシア・フォルマリズムという文学論があります。その中で、1つの手法として、英語では(以下板書) defamiliarization (「異化」) といいますが、今まで当然として見てきたものをちょっと違う角度から見ることによって、新しい発見ができるということです。私が沖縄に行くまで当然と思っていたキリス



ト教の文化、その真理の見方、現実感が一変して、「これは不思議な世界だ」と思うようになりました。日本人は、私の「真理に対する感覚」を共有していませんでした。ですから、なるほど、こういう見方もあるなど初めて思い、自分の文化に対する疑問とか新しい発見が始まりました。大学に戻ると、今度は東洋学研究科に入りました。ゆくゆくは自分のそれまでの宗教をどう理解すべきか、そして日本の宗教、東洋の宗教との関係についてもっと知りたいと思って宗教学に進みました。

そこで、日本と宗教との関係について考えました。大学院時代から、私が当然と思う「宗教」という概念は、日本人の宗教とは違うことが分かりました。大学院のパーティで、政府の省や企業から私の大学院に派遣されて修士学を取るように命じられて来た日本のエリートたちによく会いました。「何を勉強しているのですか」と聞かれるので「日本の宗教です」と答えると、いつも「私たち日本人は無宗教ですよ。宗教がない」とすぐに言われたのです。ですから、私は「ああ、そうですか。では、もうこの勉強は止めればいいのですね」と答えるしかありませんでした（笑）。そのときに本当に止めればよかったかもしれませんけど。しかし、私は彼らに聞きました。「では、お正月に神社にお参りしますか」、「はい、もちろんそういうことはしますが、それは宗教ではないのです。それは文化です」。このようにはっきりと、宗教の概念と文化の概念を分けて考えていると分かりました。

島藺先生も、何年か前の論文の1つに、宗教という熟語の歴史について書かれたと思います。私も自分で調べてみたところ、新語として1857年ごろに初めて貿易協定の中に表れたようです。当時、「religion」という新しい概念をどういうふうに理解すべきかと日本人は悩んでいました。それまでにキリスト教を知っていましたが、それは禁止された「宗教」でした。宗門があって自覚的にそこに入るもの、社会の1つの集団の中のサブグループとして存在するもの、それが宗教だというふうに考えている人が多いのではないかと思いました。そのように

自覚的にグループに入る人は比較的に少ないので、自分には宗教がないと考える人が多いのです。そのほかのこと、神社やお寺でお葬式をしたり、あるいは七五三や加持祈祷をしたりすることは宗教ではないと思っている人が結構います。しかし、西洋の宗教学という学問から見れば、それは明らかに宗教的な行為です。

そういうところから、日本と日本人の宗教にもっと関心を持つようになりました。今は神道文化学部に入っていますが、私は特に江戸時代の民間信仰、お伊勢参りとかお陰参りといった宗教的行動としての巡礼に関心を持って、それを研究するために日本に来ました。そのような民間信仰が非常に強かった江戸時代が面白いと思っています。幕末から明治、近代にかけて様々な新宗教が現れましたが、それを理解するためにも、前段階である江戸時代の民間信仰をもっと勉強しなければならないと思っています。

オウム事件、9・11のテロ事件、あるいは一般的な宗教に対する無関心にどう対応すべきかが日本の1つの大きな問題だと思っていますが、私も学生たちと対話しながらできるだけ理解しようと思っています。

## ■私と仏教と日本

ランジャナ・ムコパディヤヤー

(名古屋市立大学大学院人間文化研究科

助教授、S G R A 研究員)

日本人の皆さんに、「私は日本の仏教を研究しています」と言うと、「えーっ、インドが仏教の発祥地なのに、なぜわざわざ日本での仏教をやっているの?」とよく聞かれます。日本の仏教の歴史は長いですが、私は、特に近代仏教の社会活動に関する研究をしています。「日本仏教の社会活動を研究しています」と説明すると、「へえ、日本の仏教が社会活動をやっているんですか。お葬式以外のところでお坊さんを全く見かけないのに」。そういう反応が

あるのは、ある意味で当然だとは思いますが、「日本の仏教には社会性がない」、「日本の仏教は全く社会貢献をしていない」、そういうイメージや思いこみが非常に強いと思います。

私がなぜ日本の宗教に興味を持ったかということをお話します。ちょうど日本について研究を始めたころ、インドで原理主義問題が非常に大きくなっていました。インドでは原理主義問題は昔からありますが、当時、問題になっていたのは、ヒンズー教の原理主義でした。以前からイスラームやキリスト教や仏教の原理主義がありましたが、ヒンズー教では、特に1980年代がピークになりました。メディアは単純に原理主義問題といていましたが、当時、インテリの人たちや研究者の間でも、インドは世俗国家になりすぎたからこういう原理主義問題があえて起こっていると言う人たちもいました。宗教はもっと社会的貢献できるのに、それをわざと抑えているのではないか。インドでは8割がヒンズー教ですから、人間は誰でも宗教性を持っているのだから、それをもっと活用すべきではないか。宗教倫理をもっと公の場で出すべきではないか。いろいろな議論がありましたが、原理主義を支援するわけではないけれど、もう少し宗教を認めるべきだという意見が強い時代でした。

ちょうどそのとき私は大学院で日本の研究を始めたところでしたが、日本の近代に同じことが起きていたように感じました。つまり、明治維新に神仏分離が起こりました。1つの結果として出てきたのが、廃仏棄釈、つまり、仏教に対する弾圧でした。仏像を壊したり、お寺を壊したり、僧侶たちを還俗させたりしました。仏教に対する民衆的な不満も出てきました。仏教はいわゆる古い時代や封建社会を代表し象徴するものとして排除されました。廃仏棄釈が起こると、仏教に関わる人たちの間では、

「仏教はどのように社会にかかわるべきか」、「仏教をどのように社会国家に貢献するような宗教にしなければならないか」という議論が始まりました。この議論が仏教を近代化させる大きな糸口になっていきました。

うちは軍人の家です。父は空軍で働いていました。兄は、今も、軍隊に入っています。兄が19歳のときは、当時の若い人同様、宗教心が全くありませんでした。兄が軍隊に送られるとき、父が兄に、「戦場で最後の最後のときに残るのは信仰しかないよ。だから、あなたはもう少し信仰を持った方がいい」と言いました。兵隊さんが戦場に送られます

が、戦争で何人が亡くなったか、何人が帰ってきたか、数字しか挙げられない。戦争に送り出した人間が、どこか遠いところで亡くなってしまったと父が思い、そのときは彼らの冥福を祈るしかありませんでした。この人たちの来世がよくなるように考えるしかありません。

我が家の軍人的な背景により、信仰が非常に大事にされたということが言えると思います。

日本に来て私は仏教について関心を持つようになり、島藺先生のご指導の下にずっと研究してきました。私の研究では、「社会参加仏教」という言葉を使っていますが、英語では Engaged Buddhism という言葉があります。つまり、仏教がどういうふうに社会にかかわるかということです。阿満利磨先生もこの分野の研究をされています。浄土真宗や他の宗派の方々は、日本仏教の社会的かかわり合いについて非常に疑問を持っています。日本仏教は戦時国家に加担してしまったことを批判しています。でも、日本では教育の現場では仏教のかかわりが多いのです。仏教の各宗派が必ず保育園を持っています。また、中国・韓国・日本を比べると、日本が仏教系の大学が一番多いと思います。日本の方はそう



いう大学に通っても、背景に仏教があることを知らないことも多いようです。例えば、私は長い間、法音寺という名古屋のお寺を調査してきましたが、そのお寺が日本初の福祉専門の大学である「日本福祉大学」を建てました。でも、その大学に通う学生たちは、お寺が大学を建てていることを知りません。

2年前から、私は名古屋市立大学で宗教学や日本学を教えるようになりました。まず、学生にどんな宗教に関心を持っているかを聞くと、ユダヤ教、キリスト教やイスラームと答えます。今の世界情勢、宗教紛争によって宗教に対する関心が高まったが、自分の宗教に対する意識が高まったということでは余りありません。逆に、宗教というと、イスラーム、キリスト教と思うようです。

私は、今、できるだけ学生に日本の宗教や家の宗教、自分とかかわり合いを持つ宗教に関心を向けさせるようにしています。例えば学生たちに自分の檀家寺の調査をさせています。自分の家の宗教は何だろう、まずそれを調べてもらいます。特に、名古屋辺りでは、出前法事、つまり、お坊さんが家に来るような伝統社会の習慣がまだ残っているし、3世代一緒に住む傾向もありますから、おじいさんやおばあさんが亡くなられた場合は毎月お坊さんが家に来ています。だから、お坊さんにインタビューさせて、どういう宗派か聞いてみます。自分の身近なところに宗教があります。それをもっと意識しない限りは、ほかの宗教を幾ら勉強してもしょうがない、その宗教の意味が分からないと私は思います。それは、私が自分の経験からも分かっていることです。

## ■私とキリスト教と日本

### ミラ・ゾンターク

(富坂キリスト教センター研究主事、  
SGRA 研究員)

私は旧東ドイツの出身です。既に存在していない国です。時々、国に帰るつもりはありますかと聞かれますが、そのとき、「私の国はもう存在しないの

ですよ」と言うこともあります。ちょうど19歳になると、高校を終えて大学に入るべき年でしたが、そのときに、東ドイツと西ドイツの壁がなくなり統一されました。つまり、19歳まで、私は社会主義の教育を強く受けました。普通の生徒より強く受けたと思います。旧東ドイツでは、宗教というとキリスト教でした。キリスト教が弾圧されたのではないかと聞かれますが、余り強く表面に出なかったのは確かです。19歳のときまでは、宗教についてもあくまで社会主義派の視点から考えました。

社会主義派の宗教に関する考え方は何でしょうか。宗教はアヘンだといひ、色々な制約がありました。社会主義の国家というのは労働者が支配者になっているということもあり、インテリの方はいつでも自分のやっている仕事・研究が本当に利益を生み出しているということを証明しなければなりません。そういう意味でも、宗教に対する私の関心は、宗教は社会の中で何ができるかということがメインでした。

今日ここに来られた方がご存じかどうか分かりませんが、東ドイツと西ドイツの統一の過程の中で重要な役割を果たしたのは、当時のキリスト教会の信者たちでした。東には教会員の数が出なかったともいえますが、1989年には信者でない人も教会に集まりましたし、教会の中から「平和的な改革」を起こして、結局は壁の崩壊に繋がったということです。当時、私は思春期で、こういうことをよく考えるような年代でした。実際の日常社会の中で、宗教が果たしうる1つの役割を経験できました。その経験はすごく印象的で、私もクリスチャンになり、大学に入って宗教の研究を必ずやりたいと思うようになりました。宗教はマイナーな科目として大学で取り上げました。メジャーにしたのは、日本学です。

どうして日本学か。日本学を学び始めると、本当によく「どうして日本に興味を持つようになったのですか」という質問に答えなくてはなりません。いろいろな答え方をしましたが、当時の私は美術と言語に興味がありました。そして、大学に入る前に



はどっちを選ぶかということをよく考えましたが、ある意味では両方が言語です。ビジュアルな言葉と本来の言葉です。そのとき、中国起源の文字はそれ自身が絵になっているということを知り、すごく興味を抱きました。

スポーツもやり、ある「道」に入りました。柔道です。柔道は本来の意味で日本の武道ではなく、明治時代に作られたスポーツです。道という名前がついていますが、本当の意味での道ではないかもしれません。柔道はどうだったか分かりませんが、剣道の方は、第二次世界大戦に向かって国家でも結構取り上げられ、学校のスポーツ体育教育の中で使用されました。私が学んだ柔道も同じように国家に使用されました。つまり、防衛活動として、あるいは大きな会議があるときに問題が起こらないように、柔道や防衛技術を学んだ人を国家が派遣しました。そういう文脈の中で、日本のある道と接して、結局日本学を学びたいと決めました。

このように、16年くらい前から、日本学と神学を学ぶようになりました。神学は神様の学問です。日本学と神学を結ぶテーマを修士論文のために探しました。当時の指導教官に、「自分の履歴から出てくるようなテーマが一番やりやすいのではないか」と言われましたが、自分の履歴を考えても見つかりませんでした。でも、今考えると、宗教の広い分野の中で私が一番興味を持っているのは、自分の履歴と結びついているようなテーマなのです。つまり、「現代社会における宗教の実際の役割」とか「宗

教ができること」というのが、私が一番興味を持っているテーマです。

去年から、富坂キリスト教センターに就職し、研究会を開いて研究活動を進めています。私の研究、関心とセンターの本来の方針は、合致していると思います。キリスト教のセンターですが、キリスト教の教え自体ではなく、キリスト教が日本の社会の中で倫理の面で果たさなければならない役割について研究しています。日本のキリスト教は、教育面でかなりの役割を果たしてきたといえます。ランジャンナさんが仏教の教育へ果たした貢献について話しましたが、もしかして、キリスト教は明治時代になって仏教の役割を受け継いだと言えるかもしれません。仏教はある時期教育の場で弱くなったかもしれませんが、そのかわりにキリスト教が強くなったと言えるかもしれません。しかしながら、そもそも、宗教と教育は切り離せない分野です。私は最近、宗教教育の課題を取り上げて、私立学校では宗教教育は依然としてあり、憲法によっても保障されていますが、公立学校においてもできるような、あるいは期待されるような、望ましい宗教教育について考えています。

## ■私とイスラームと日本

セリム・ユジェル・ギュレチ

(イスラーム文化センター事務総長)

京都から500数キロも走ってくると、さすがに疲れます。

「アッサラームアレイクム」。

イスラーム教徒はお土産を持っていく習慣がありまして、私も「八つ橋」を持ってきたかったのですが、買ってくる時間がなかったので、今日のお土産は挨拶の言葉にしたいと思います。

今、私が、アラビア語で申し上げました「アッサラームアレイクム」というのは、世界人口の5分の1を成しているイスラーム教のすべて、国、国境関係なく、肌の色も関係なく、すべての人に通

じる言葉です。その言葉を非イスラームの人から聞いても、イスラーム教徒はうれしく思って心の扉を開きます。ですから、是非とも、どこかでイスラーム教徒の人と出会う機会が出てきたそのときに、この「アッサラームアレイクム」と挨拶してください。その人の世界が自分に開くこととなりますので、どこかに書き留めておいていただきたいと思います。

私より前にお話しなさった発表者の方々もおっしゃったとおり、10分というのはとても物足りないわけですが、考えてみると、一瞬というものも非常に大事です。その一瞬の中に世界を入れることも可能です。一瞬のうちに世界のどこかに飛んで、また自分がいる所に戻ってくる。人がどの次元からその時間を見ているか、それによって時間の感覚、受け止め方、その中に何を入れるかということが、いろいろ変わってくると思います。それで私は、主催者側から決められた枠組みに沿ってお話をできるだけ短くして申し上げたいと思います。

名前はセリムです。日本語に訳すと「純、ピュア」という意味であります。私が今なぜここに立っているのか不思議なくらいではありますが、決して宗教学の勉強のために来たわけではありません。いろいろ経過があり、最終的に宗教になってしまっていますが、それが1つ天命かという感じすらします。

イスラームに六信と五行という2つの柱があります。六信というのは信仰の上での柱です。神の唯一性を信仰すること、経典があることを信仰すること、それから神は人々に自分の意思・真理を伝えるための預言者たちをお送りになったということなどを信仰することなどですが、その1つには、天命を信仰することがあります。人はいろいろ企画しますが、最終的には人が思うように物事が動くのではなく、それが唯一神が創造なさったような形で物事が動くということです。人間もちろんその中で自分の役割があり、それは自分に与えられた判断力や計画力によっていろいろ仕事を整理することができますが、最後に、神の望むところで物事が実現していきます。それはイスラームの用語では、「インシャーアッラー」という言葉になります。「神が望

むならば」ということです。ですから、私が今ここにいることも、その天命というものかもしれません。もう1つ柱は、実践です。日常的な礼拝を行う、断食をする、巡礼に行くといったことなどです。

私はトルコでは行政学を専門にしていました。私は渥美財団の2期生の奨学生の頃、東京大学に籍を置き、日本の地方自治、特に、都道府県知事の研究をしていました。戦前と戦後の比較で、官選から公選になり、それは日本に何をもたらしたかということテーマに修士課程と博士課程で研究していました。最終的な目的は、その日本の経験を持って、今でも国が任命する都道府県知事制度を持つトルコに帰り、近い将来に起きるであろう改革に生かすはずでした。

日本に来たのが1990年で、91年に湾岸戦争が勃発しました。戦争開始の翌日、大学の研究室に行くと、扉の前に数人の新聞記者が待っていました。私の指導教官が慌ただしく、「どこにいたの？あなたにインタビューしたがっている」と言うのです。「なぜですか」と聞いたら、湾岸戦争について聞きたいとのことでした。「私とどういう関係があるの？」と不思議に思いながら記者の前に立ちましたが、最終的に聞かれたのは、「戦争についてどう思いますか」「アメリカに対してどういう気持ちですか」「イラクは同じイスラーム教徒で、あなたはどのような感じですか」というようなことでした。あごひげはありませんでしたが口ひげはあり、今とは違って真っ黒な22～23歳の青年でしたが、「あ、サダムに似



ていますね」と言われて、「一体この人たちはどういう感覚をしているのだろう」と不思議に思いながら、片言の日本語で回答しようとしました。そして、インタビューはそれで終わりではなく、その後もずっといろいろな所から声がかかるようになりました。日本にいて、日本語でイスラームのことを話せる現地の人には珍しいこともあり、いろいろな所に出るようになり、最終的にはイスラーム研究者になってしまいました。

東京には、東京モスクが渋谷区にあります。元々は1938年に建てられたもので、86年に取り壊されました。私は93年に東京に来ましたが、当時モスクは更地で、非常に悲しく思いました。トルコ政府と日本の会社の間に入って、東京モスクの再建を93年から2000年にかけてやりました。トルコ大使館の職員をやったこともあります。その後、東京モスクの副代表を務めました。そちらに務めて、イスラームのお話をする機会も増えました。

ある日、京都大学のある教授が、「行政学専門のセリムがイスラームのことをしゃべるのはおかしい。あなたは日本で行政学でやっていける自信があるか」と聞くので、「ないです。なぜなら、もう5～6年もブランクが入ってしまっているんで、私を行政学の教授として雇ってくれる大学もないかもしれない」と答えたら、「それならば、もう一度やり直せばいいじゃないか。あなたは元々アカデミシャンとして日本に来たのだから、それで進めればいいじゃないか」「どうすればいいですか」と聞いたら、「イスラーム学をやりなさい」と言われ、「私にできますか」と聞いたら、「こういう日本語をしゃべっているのだから大丈夫だろう。読み書きもできるし」と言われました。

それにもちょっと誘惑されて、最終的に、私は長かった東京の生活も、好きだった東京の生活もやめて、京都に行きました。なぜ、京都かということもよく聞かれますが、まず、その先生のお誘いがあったのですが、もう1つ決め手がありました。東京の人がどういっても、やはり日本の文化の中心は京都です。日本の言葉を借りて宗教のメッカといいま

しょうか、その京都にいろいろな宗教の施設があるのに、なんとイスラーム教の施設が1つもない。これはもう1つ天命かなど。そちらに行って、京都に史上初の礼拝所を造りました。4階建ての建物の地下と1階を購入し、地下は礼拝施設にして、1階は文化センターにして、そちらの文化センターの代表という肩書きも自分で作りました。スタッフはほかにもいますが、活動に励んでいる毎日です。日本で初めて、日本の方のためにオリジナルで書いたイスラームについてのパンフレットを作成し配布しています。それから、「何でも聞けるイスラームの会」という会を作り、今、京都・名古屋・大阪・東京で毎週土曜日、第1回は京都、第2回は名古屋、第3回は大阪、第4回は東京という形でやっています。

東京では、市ヶ谷の自動車会館という所で毎月第4土曜日2時からやっています。私が一方的に何かをしゃべるのではなくて、いらっしゃる方々はイスラームについて質問されたい方が多いのです。そういった方々に1つの受け皿としての会として作っており、いろいろな質問を出していただいて、その中で私の力が足りる範囲のことは回答して、足りないものは宿題にさせてもらって次回答える、あるいはメールなどで回答するという活動をしています。

「なぜイスラームなのか」。なぜという質問はありません。それは当たり前です。宗教は、魚にとっての水、人間にとっての空気のようなものです。どこかのケーキ屋さんに行って時々買うようなケーキではありません。ないと生きていけません。そういうものです。

研究テーマは、先ほど二人の方がお話しされましたが、宗教と文化です。日本は、よく宗教のない国であると、日本の方がおっしゃいますが、私から見ると、日本ほど宗教熱心な人々はいないと個人的に考えています。16～17年の日本における生活体験に基づく考えです。その宗教を文化にする、要するに、宗教、教えを日常生活にするということです。

今、宗教と文化の間で中間的な役割を果たしている、日本語ではちょっとおかしく訳されて残念ですが「神秘主義」ということに興味を持っています。

イスラーム用語では「タサウフ」といいます。トルコの現代タサウフの状況、それと社会生活とのかかわり、それから政界とのかかわり、それについての研究をまとめてみようと思っはいますが、研究の時間はなかなかありません。いつかまとめて出したいとは思っています。司会者が怒らないように、ここでいったんお話をやめさせていただきたいと思ひます。

## パネルディスカッション

# 日本人と宗教

- パネリスト： ノルマン・ヘイヴンズ 氏（國學院大學神道文化学部助教授）  
ランジャナ・ムコパディヤーヤ 氏  
（名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授、SGRA研究員）  
ミラ・ゾンターク 氏（富坂キリスト教センター研究主事、SGRA研究員）  
セリム・ユジェル・ギュレチ 氏（イスラーム文化センター事務総長）
- 進行： 島藺 進 氏（東京大学教授）

（島藺） 4人の方々のお話を伺って、本当にまれな機会だと思いました。日本のことをよくご存じで、場合によっては日本人よりも日本語が上手なのではないでしょうか。それは私がよく感じていることですけれども、今日はまたそういう気持ちを持ちました。それぞれ自分が親しんでいる宗教を踏まえてお話を伺えるのは大変楽しみです。充実したお話を伺えればと思います。

実は、セリムさんは、今日ここにきていただけか心配しておりました。と申しますのは、数日前に3番目のお子さんがお生まれになって、今日退院されたのです。お父さんも上の二人のお子さんのお世話をしなければならぬので、京都から来ていただけか心配でした。そこで、セリムさんのおいでに出来ない場合に、代役としてロシアのチェチェン問題について研究しているSGRAのヒョン・ヨンスさんにお話をさせていただく準備をしておりました。といっても、昨日突然お願いしたらしいですが、ヒョンさんの質問からお願いします。宗教と暴力の問題についてです。「今日のお話とどういうふうに関係させていただけるか分かりませんが、我々はオウム事件や9・11事件以後の世界で宗教を考えています。宗教が暴力に深くかかわっています。宗教というのは平和を求めるもの。セリムさん、

「アッサラーム・アライクム」は「あなたにも平安を」ですね。宗教は、平和を求めるものであるはずなのに、なぜ暴力へ向かってしまうのかということが、我々の心に突き刺さっていると思います。まずは、ヒョンさんに、ご自分のご経験からお話をさせていただきます。

（ヒョン） 私は今、東京大学の総合文化研究科の地域文化研究専攻で、ロシアという国の中で、抵抗運動を展開しているチェチェンという小さな国とイスラームの関係を研究しています。ただいま博士5年目で、博士論文の最後の最後という段階です。私は韓国から参りましたが、日本での生活は8年目になります。そもそも韓国が日本の植民地時代だったときから、家族が全員キリスト教でして、私も高校生のころまで、キリスト教の牧師になる使命感に燃えていた時期があります。家族は全く篤実なキリスト教ですが、私だけは今キリスト教徒からちょっと進路を変えて、仏教なりイスラームなり、いろいろな宗教に関心を持ちました。自分で体験する宗教を大事にしたいと思っているのですが、その結果、今はイスラームにたどり着いたという数奇な運命をたどっています。

しかも、日本でロシアのイスラームを研究している韓国人という、「は？」と、いつでもどこでも

だれにでも言われます。韓国に行っても日本に行っても。1月にはイスタンブールに行ってきたのですが、イスタンブールで研究調査をしているときでも、トルコ人たちからもそう言われました。何で日本で韓国人がイスラームのことをと。しかも、主流ではなくてロシアの中の小さな国のイスラームを研究しているのかと言われます。自分なりにこれに対して面白みのある答えを見付けないといけないのではないかという不安はあります。今も分かりません。なぜ私がそういう運命にたどり着いていったのか不思議です。天命ですかね（笑）。

私は、個人的にムスリムではないのですが、韓国にあるモスク、ソウルにある結構素晴らしいモスクで2年間、コーランの読み方を勉強したことがあります。そのときにいろいろなムスリムの方と知り合いになりました。私は比較的キリスト教について自分なりに詳しく勉強してきたという自負を持っていたのですが、いろいろな神学的な疑問にぶつかっていました。その答えがなんとイスラームのコーランに書いてあったという体験から、ものすごくイスラームに興味を持ち始めたという経緯があります。

私が今、疑問に思っていることがあります。いろいろな宗教は儀礼も素晴らしいし、どこに行っても宗教に熱心な方々には独特な雰囲気があります。その方々に接すると、こちらも和まされるという経験を何回もします。どこに行っても宗教に熱心な方々はものすごく優しい方々で、人に配慮するし、自分だけを考えるのではなくて、周りのことを考えるという人たちで一杯です。でも、今この時代になっ

て、宗教といったら、暴力、テロ、そして戦争が起きるといふ観念が巷にあふれています。私もそういうテーマで論文を書いているのですが、なぜイスラームという素晴らしい宗教の名の下で、こんなに殺戮事件が起こるのか、なぜ兄弟同士で戦わなければいけないのかという疑問は、まだ解決されていません。そういうことを考えるたびに、私は、一体この問題をどういうふうに解決していけばいいのかと、いつも不安を感じています。

今日のパネリストの方々への質問は、暴力と宗教です。今、暴力といえば何といってもイスラームと結び付けられる傾向が強いですが、仏教なり、キリ



スト教なり、イスラームなり、神道なりも、暴力問題と関わりがないとはいえないかもしれません。神道は、やはり韓国人としては、日本の植民地時代の神社参拝と関連付けられて、神道に対するイメージがものすごく悪いのも事実で

す。これもやはり暴力問題の1つとして取り扱わなければいけないという考えを持っております。いろいろな宗教が全部、「自分の宗教は正しい」「平和の宗教だ」そして、「何の問題もない」と自己主張をしていますが、現実的には全く逆の風潮が見られます。私の個人的な考えとしては、どの宗教でも、暴力問題から完全に自由になることはできないと思います。パネリストの方々は、自分が今研究されている宗教が暴力の問題とどう結びついていると思われませんか。自分の宗教は暴力問題に対してどのような基本的な立場を持っているのか、そして、今の時代、宗教が暴力問題にどういうふうに取り組んでいけばいいのか、簡単に説明していただきたいと思います。

(島菌) ありがとうございます。本当に重要な質問をしていただいたのですが、今日のテーマは、「日本人と宗教」ということなので、例えば、イスラームではこうだ、キリスト教ではこうだということもあると思いますが、日本と結び付けてみたいと思います。そこで、関連したご質問をいただいているので、まず、それを読み上げます。

塩野さんからいただいた質問です。「多くの宗教を受け入れてきた日本人から見ると、他の宗教を排除しようとするキリスト教やイスラーム教の考え方が理解できません。倫理面では共通する部分が多いと思いますので、世界宗教に統合できる可能性はないのでしょうか」。先ほど私もいろいろな宗教が自分の中に入っていると言いました。私は、しばらく前にエジプトのカイロで6週間過ごしたので、ひげを生やしたのですけれども、向こうで「おまえはムスリムか」と言われると非常にうれしく思いました。イスラーム教徒に自分はすごい親近感を感じるのに、どうして一緒に暮らしていけないのか、日本人の感覚としては、宗教が違っていても一緒にいられるのではないかという気持ちを持つこともありました。

しかし、逆に、もしかしたら日本人には日本人の閉鎖的なところもあるのではないのでしょうか。今、神道についてヒョンさんがおっしゃいましたが、日本人は宗教同士が仲よくできるはずだと思ってても、日本自体がそうではないと思っている人たちが実際にいる。今、日本では宗教協力運動が非常に盛んです。仏教、神道、キリスト教が、世界に向けて宗教対話や宗教協力を訴える運動も盛んにしています。そういう日本人なのですが、その中に、もしかしたら宗教のとらえ方が余りに日本的なところがあるのかもしれないということは、私も前から考えていることです。そういうことにも触れていただきながら、皆さんにお答えいただきます。

(ムコパディヤーヤ) まず日本人が何でも受け入

れるから包括的だけど、ほかの国々は宗教を巡る紛争が起こっているからそれが排他的だということについてですが、私の学生たちの中でも、そういう考え方が非常に強くあります。「日本ではいろいろな宗教が一緒になってもけんかがないのに、なぜ他国ではあるのでしょうか。」という質問に対して、私としてもなかなか答えられないのです。

やはりベースには神道的なところがあるのではないかと思います。神道があって、そこに仏教とかいろいろな宗教が入ってきました。その時、神道が何でも受け入れるような形の宗教だったからかもしれません。もちろん、先ほどヒョンさんもおっしゃったように、特に中国人とか韓国人にとっては、神道のイメージが、戦前の日本の文化を象徴するものとしてあります。今年、私は日本の近代における信仰を教えていますけれども、私の中国人の学生がその授業をやめてしまった。私はとても悔しく思っています。

日本人は、神道は非常に受け入れやすいとか、日本の宗教は多宗教であると思っっているのですけれども、もしかしたら外国の人たちは、様々な宗教が混じった日本の宗教というふうに見ていて、それが戦前、神社を参拝させたりしたと見ているかもしれない。そこで非常に違和感がある。そこには、向こうから見た歴史があり、神道や日本の宗教に対する違和感が生じる。

どの宗教でも、ある意味で平和だと思うけれども、社会秩序を守るべきという概念がある。その秩序をどう守るか。それが政治権力を正当化する。それが時には暴力を正当化してしまう。それは神道でも仏教でもヒンドゥー教でもどの宗教でもあります。宗教は政治権力に協力的で、それが宗教と暴力を結ぶ1つの理由になっていると思います。

私たちは単純に、宗教イコール平和と考えているかもしれませんが。今の時代、宗教は平和だという概念が浸透してきているかもしれませんが、それは時代によって変わる解釈だと思います。宗教はいつでも同じではなかった。時代がどう宗教を解釈してい

るか、それによって宗教を見る目が変わっていきます。今は平和を求めている時代だから宗教に平和を見ている。

また、自分を犠牲にするという概念もどの宗教にもあります。自分を犠牲にする、あるいは他者を犠牲にするかということと、宗教と暴力の関係には関連があるようにも思います。宗教の儀式では、いろいろなところで動物が犠牲になります。例えば、熊野神社で熊を貢ぎますが、それは動物に対する暴力です。しかも、それを通じて人間の共同体が成立する。みんながその肉を食べる。それを神様にささげる。ヒンドゥー教のお寺でも、動物を犠牲にする儀式が行われています。そう考えると、宗教には暴力が正当化される傾向があると思います。

(ヘイヴンズ) 私は異端者ですから、異端的なことを言いたいです。日本においても、たとえば、日蓮宗はかなり排他的で、一向一揆もありましたから、宗教は必ずしもすべてが平和的とは言えないと思います。それから、特に近代以降、日本は調和的な国ですと言いますが、調和というものは美德であると同時に武器でもあるのです。つまり、「出るくいは打たれる」という表現がありますが、調和的でない要素を調和するようにたたくのです。だから、まず、全てを調和的に受け入れるということではないと言いたいです。

そして、暴力についてですが、近代になって宗教と政治が分離したことによって、宗教は平和的だと考えるようになったのではないかと思います。最近の研究の中でも、暴力は宗教の根本的な要素の1つ、発生期から中心となる要素の1つではないかといわれています。日本にも「人柱」という表現がありますが、「いけにえ」ほどの宗教にも見られます。宗教のすべては神様とか愛とか平和とかというきれいなものではないということを、まず理解しなければならぬと思います。

宗教と文化の概念がどこでオーバーラップするか分からないのですが、宗教には文明観や現実感が含まれています。私が好きな学者の一人にク

リフォード・ギアツという人類学者がいますが、彼の宗教の定義には、神という言葉がどこにも出てこないのです。彼によれば宗教は、「人間の中に広く行きわたった永続する情緒と動機づけを打ち立てる象徴の体系である。それは、一般的な存在の秩序の概念を形成し、これらの概念の事実性の層をもっておおい、そのために情緒と動機づけが独特な形で現実的であるように見える」のです。非常に強い現実感を与えることによって、「これしかない」「これは現実だ」と考えさせ、それに反する人たちはきちがいだということになり、それを排他的に受け入れないという傾向があると思います。これも宗教だと思います。

(ギユレチ) 人間はだれでも肉体と精神から成り立っていると考えます。精神は2つに分かれています。欲と良心です。欲と良心と肉体の3つのバランスを図りながら生きている人間のことを「よい人間」と、どの宗教も定義していると思います。これは、イスラームだけではなくて、キリスト教も仏教も、アフリカの森林の中の種族の信仰しているものも大体そういうふうを考えています。人間の欲を可能な限り抑えて、良心を可能な限り養って、その間で体を守っていく。体を守るのと同時に、自分の家族も自分の資産も守っていくことから成り立っています。

暴力、犯罪が宗教によってなくなるか、あるいはほかの治療法によってなくなるかということ、それは恐らくなくなるというのが現実的な答えではないかと思います。その理由は、人間は創造されるときに欲があって創られたからです。

さきほど、イスラーム教やキリスト教などは、ほかの宗教を排除しようとすると言われましたけれども、それは勘違いです。その証人は歴史的ないろいろな事実でありまして、イスラーム圏あるいはキリスト教圏の現実であります。キリスト教圏にイスラーム教徒の人はたくさん住んでいますし、ユダヤ教徒の人もたくさん住んでいますし、仏教徒の人もたくさん住んでいて、同じ社会を形成し

ているのです。同じようにイスラーム圏の中にも、たくさんのキリスト教徒が住んでいて、仏教徒も中国などを視野に入れますとたくさん住んでいると言っても間違いではないと思うし、信仰を持っていない人も一緒に住んでいます。ある宗教が他の宗教を排除しようとするということは、理論上成り立っていても、現実はそれについていっていないというのが現状であると思います。

今、イスラーム教が「暴力」という言葉、あるいは「過激」という言葉とともに使われていますので例に取りますが、イスラーム教の中に、例えばほかの人をその人の宗教がゆえに攻撃してよいという教えはない。では、どのようにイスラームは折り合いを付けているかという、私は私の信仰することを説明する。あなたはあなたの信仰することを説明する。お互いに判断力というものがあります。イスラームは何よりも判断力の自由というものを大事にする宗教であります。あなたが私の説明に納得するならば、私と同じ信仰をすればいい。あるいは、私があるあなたの説明に納得するならば、その納得した時点で、もうあなたと私は友になる。もしお互いに納得しなければ、言うことは1つです。「私は私の宗教をやりますよ。あなたもあなたの宗教をやりなさい」と。また、クルアーンの中の一節に、「他の信仰者の信仰するものに対しては悪口を言うな。相手もあなたの大切にしているものに悪口を言うてくる。そうになったらどうするのだ」とも言っています。

最近のファッションナブルな質問に移りましょう。一連の議論の中で一番の被害者は「宗教」という言葉かもしれません。宗教というのはその信者に対して相手の人を攻撃しなさいとか、相手の人に悪口を言いなさいとか、宗教のゆえにあしなさい、こうしなさいということは余りないのです。よくあるのは、政治的な駆け引きです。土地の奪い合いとか、国の利益とか、植民地とか、自分の国や自分の国民に対する他の国のやり方とか、それに対する不満感とか、そういうものがある。しかし、その場所で起きている小さな問題が解決しにくいので、双方が自

分に協力する人を誘うために宗教をよく利用するのです。

パレスチナ問題を取ってみても、元々土地の問題です。最初にユダヤ教徒の人たちがその地域をお金を出して土地を買った。売ったのはイスラーム教徒でした。平気で自分の土地を売った。その土地が拡大して、イスラエルという国が作られた。すると、当然、軍隊を持った。お金が持ち込まれた。これからはもうお金を出す必要はないので、国の権力の下にパレスチナ人の土地を奪った。この国の将来がかかっているものですから、そのように進めたのです。それに対してパレスチナの人たちは、自分たちで解決できない。集団を作る。そちらの集団でも解決できない。そこで、「こちらのイスラーム教徒の兄弟が殺されているのにあなたは平和で暮らしていいのか。援助をしてくれ」と国際的な呼びかけをした。宗教が利用される典型的なパターンです。アハマドというパレスチナの人が何かを起こしたときには、「イスラーム教徒のアハマド」とくっつけられて報道されることが多く、それが結果的にはイスラームのイメージを打撃するようになってきたというのが、この30年来の出来事であります。

宗教の暴力はイスラームだけに限ったことと言えるでしょうか。第一次世界大戦を起こしたのはイスラーム教徒ではないですし、第二次世界大戦をやったのもイスラーム教徒ではないですし、広島や長崎に原爆を落としたのもイスラーム教徒ではないです。このような例は歴史をずっと古い時代までさかのぼっていても言えると思います。では、例えば、長崎に原爆を落としたのはキリスト教徒だからキリスト教が悪いのかという、キリスト教は決してその人に対して長崎、広島に爆弾を落とささいとは言っていない。です、勘違いしないように注意しなければならないと私は思っています。

しかし、イスラームの場合、もう1つのパラドクスがあります。それはイスラーム諸国の現状とイスラーム教徒の状況です。大体のイスラームの国を見

てみますと、独裁国家が多いのです。独裁国家であるにもかかわらず、西洋化を進めようとしています。その西洋化というのは、下からのうねりではなくて、上からの植えつけです。上から入れようとするのです。その独裁国家は大体どこから支持を受けているのかというと、西洋のいわゆる民主国家によって支持されているのです。特に20世紀に入ってからそういった形で西洋化が進められてきたのですけれども、一向に国民の生活が裕福になっていません。

すると、その国の国民は、「いろいろなことが約束されていたのに、それが実現しないのは、この西洋的な政策を打ち出してきてやってきたうちの独裁者がでたらめなのだ、何の役にも立たないのだ」と考えるようになります。「西洋の民主国家では、その国の人たちが自由に政治に参加しているのに、うちではなぜ参加できないのか」と。そして、「では、うちの政治に参加しようではないか」という動きに出るのです。一人二人ではもちろん物事を起こすことができませんから、まず慈善団体になって、それから政治集団になっていくのです。慈善団体になったときには独裁政権にとっては全然問題がない。「どうぞやってくれ」という感じでやらせるのですけれども、いざ政党を作ろう、あるいは政治結社を作ろうとしたときには、そのときまでその国を牛耳ってきた独裁者の気に障るわけです。そういった人たちをやっつけたい。ただ、今は情報手段が非常に発達しているので、軍隊を出動させて彼らを始末すると国際社会の批判を浴びることになる。そこで、その独裁政権が何をするかということ、通信社は大体国営ですから、まず、海外向けに報道でその人たちのイメージを崩していくのです。「この人たちは西洋の価値観に反する人たちです。この人たちがこの国の政治を握ることになると、彼らがどの道に走るか分からない。脅威だ」というふうに宣伝するのです。その宣伝を国際社会が受けて、「あっ、そういう変なやつらなのだ」「では、彼らをつぶさなければ不安だ」「どうぞ、どうぞやってください」というムードが生まれてきます。そのムードが生ま

れたときに、独裁体制は軍隊を出動させて、彼らを始末してしまいます。

物事を起こしている、言葉を変えますと、「イスラーム過激派」と言われている多くのグループは、日本語の言葉をまた借りれば、自由民権運動をやろうとしている人たちであります。ヒョンさんの研究されているチェチェンはもうちょっと違う過程を持っているかもしれませんが、私のこの説明に同情する部分が多いのではないかと思います。もちろん、すべての過激派と言われている人たちが、民主化運動をやっているとは限りません。その中には、少数ですが、本当に暴力に走って武力的な衝突をしている人たちもいますが、それがすべてではありません。

もう1つ付け加えます。よくイスラームと暴力を結びつけている方々に、例えば、「アハマドさんがテルアビブで銃撃をした」とか「爆弾を落とした」とよく言われているのですけれども、その武器はどこで作られたのでしょうか。それも併せて言ってもらいたいと思うのです。どこの国がその武器を作ったのか。売ってくれたのか。売ってしまったのか。それを併せて、例えば、「アハマドさんがフランス製の武器で銃撃をした」と、その武器の製造、その流れ、その商売の状況も一緒に語られたらまだましかなという感じがします。

(ソントーク) 2つの点を申し上げます。最初は宗教とは何かということです。道徳と宗教はどう違うかと考えたことがあります。「道徳は人間の行為を相対化する」、「普遍化と相対化のバランスを取りながら道徳が生まれる」と何かで読んだ時に、「道徳と宗教はそんなに違うわけではない」と気づきました。人間が自分を相対化するために人間を超えるものを考えて、いろいろな知識を生み出したというわけです。セリムさんは「パンがないパン屋はない」、「宗教がなければ宗教に対する興味も起こらない」とおっしゃいましたが、宗教者の多くは、宗教はあ

る神から出されたものだと考えていると思います。しかし、人間は神について考えて宗教を生み出した、ある意味で宗教を学問として生み出して道徳的な面でバランスを取ったと考えることもできます。どちらを大事にするか（探した神様を大事にするか、人間を大事にするか）によって、その宗教の性格は随分違ってくると思うのです。

そして、どんな宗教でも、もう歴史が長いですから、いろいろな人の考えたことが入ってきています。教義学といっても、何百年、何千年の間に、人間が考えたことが入ってきています。宗教にはいろいろな人間的な側面が入っていると言う事ができます。私はそう感じています。宗教として主張されていることは、もしかして今の世界には一番足りないところではないかとよく私は考えます。キリスト教では「平和」という言葉が「愛」という言葉よりもたくさん聖書に出ていたのではないかと思います。その言葉がたくさん出るというのは、その宗教が本当に平和的だということではなくて、宗教を生み出した人が、一番願ったのが平和だったのではないかと私は思うのです。



暴力というと、最近、殺人や殺傷などの本当に激しい身体的な暴力を考えます。そして、それが宗教と結びつくと、宗教が非難されるのです。先日、私の娘が通う保育園で、あるパンフレットをもらいました。子供に対する虐待の説明と、虐待を止めようという運動の呼びかけです。でも虐待には、身体的な暴力だけではなく、精神的な暴力、そして、「無

視」という虐待もあり、色々な事件が起こるのです。日本の宗教は、今までそれほど暴力的ではなかったといっても、武器や身体的な暴力ではなくて、精神的にある人を弾圧するという面もあったし、自分のパターンに入らない信仰を持っている人をただ無視するというのもよくありました。また社会から無視されたことも多かったでしょう。

セリムさんのお話では、自分の信仰をほかの信仰を持っている人に対して説明して、そしてもしかして合意がつけば友達になるということでした。宗教活動はほかの人をじゃましない限りは許されているのですけれども、日本の文脈でいうと、自分の信仰をほかの人に教える、説明するということは、

もう既に、邪魔するということなのです。日本の「信教の自由」という問題にもつながってくるのですけれども、ただ一人が信仰しているだけではなく、説明する権利もあるというのは、むしろ西洋の信教の自由の理解ではないかと私は思います。

**(島藺)** ありがとう。とてもいいきっかけを作ってください。ご質問でした。質問者の方も何か言いたくてたまらないと思うので、ひとことコメントしてください。

**(ヒョン)** 自分の宗教と人間の本質みたいなものと結びつけて説明をされると、だれが聞いても全部納得できます。どのような宗教でも、そういう説明をいただくのです。しかしながら、どの宗教でも、自分が相手にされていないという状況の下で、自分がどういうふうに相手に接するのかというときに、

本当の宗教の特質が出て、人間の本質的な欲とか、相手に対する憎しみとかを和らげる役割を十分果たせると思うのです。自分が愛されて、自分が歓迎される立場のところでは、いい福音なり、神様の偉大なメッセージを伝えることもできますが、自分が歓迎されないところで、どういうふうにその人たちに接するのかということが問題です。正に今の時代は、歓迎されていない時代かもしれません。私は、今までは、人間が宗教はそんなに親しくなかったと思っています。歴史上、人間は宗教を利用してきたのですけれども、宗教と人間が共存していなかったのではないのでしょうか。今の時代になって、通信技術や報道が発達してグローバル時代になったからこそ、宗教が本来の役割を果たすことができるのではないのでしょうか。これから宗教がどういう役割を果たすべきかという、一番重要なのは、人間と宗教を和解させるということです。宗教同士の和解というのはもちろんのことです。このようなことをさらに深く考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

(島 蘭) 次に、宗教という言葉の定義について考えてみましょう。ギアツという人の定義を紹介してくださいましたし、宗教と道德の関係のお話もありました。いろいろな意味で、「宗教」という言葉の意味が分かりにくいということでした。特に日本人には分かりにくいのではないかという話もありました。それから、文化と宗教の関係についての質問も幾つかいただいています。私もそういうことを強調して、芸術とか武道について話しました。これはむしろ宗教というより文化なのではないかというご質問です。日本の場合はもしかして宗教と文化の区別がつきにくいのではないかということもありました。それでは、文化と宗教をどうやって区別したらいいのでしょうか。あるいは、日本の場合は特別なのでしょうか。

宗教同士がどうやって仲よくやっていけるかということともかかわっていると思いますし、日本人が宗教というものをもっと真剣に考えるにはどう

したらいいかということともかかわっていると思いますが、宗教という定義の問題や、宗教と文化の関係について、パネリストのご意見を伺いたいと思います。

(ムコパディヤーヤ) 私が日本研究を始めたとき、インドではヒンドゥー・ナショナリズムがピークだったとお話ししました。ヒンドゥー・ナショナリズムの中では、ヒンドゥー教は宗教ではなくて文化です。ヒンドゥーはインドの根本的な文化で、それが受け皿になってほかの宗教が入ってきているのです。明治維新の時、日本でも神道に関して同じ議論がありました。神道は宗教か、宗教として定義できるかと。それは島蘭先生が一番よくご存知のところですよ。ヒンドゥー教に「ダルマ」という言葉がありますが、辞典を見ると宗教として訳されています。法とかモラルティーとか道德の話がありましたが、人間の「悔い」をどういう思想や理念で裏づけるか、それを総括したものとして宗教を見るか、あるいは、それは文化の特徴なのかというような問題が関わっていると思います。ですから、文化と宗教をどう区別するかという問題は、近代化の過程の中で西洋的な概念を受け継いできた国々のどこでも、それが非常に大きな課題になっていると思います。

(島 蘭) ヒンドゥー教と神道はもしかしたら似ているのかもしれませんが。文化と宗教が重なり合っているところが大きいということなのかもしれません。それから、レリジョンという言葉で考えるよりも、「ダルマ」ですね、これはインド的な根本概念です。中国には先ほど言った「道（タオ）」みたいなものもあつたりします。こういう言葉の方が根本にある場合に、レリジョンから作った「宗教」という言葉が居心地が悪いということかもしれません。

(ヘイヴンズ) またギアツですけれども、文化の定義もあります。「文化は象徴的に表現される意味のパターンで歴史的に伝承されるもので、人間が、生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展

させるために用いる」とあります。私にとっては、宗教は文化の一部です。ある意味で超文化、メタレベルの文化です。一般的な存在のパターンを1つの秩序にアレンジして、その現実性を与えることで、陶芸や絵画など、いろいろな文化の表現があり、それは人によっては、非常に意味のあるものとして受け取られるのですが、これは存在一般の意味ではないと思います。人にとっては、ある文化が、たとえば陶芸とか絵画に究極的な意味があるとすれば、それは宗教にもなってしまうのです。けれども、そこまではやはり程度の問題かもしれません。

**(島藺)** 軽い気持ちで陶芸に親しんでいる人は「宗教的なもの」といっても困惑するでしょうね。しかし、名人となると深さがある、宗教的な悟りの境地に近いように思える。広さや重さや深さが、狭かったり浅かったり軽かったりするとまだ宗教とは言えないけれど、一般的には大きな深いものに行き届いているということでしょうか。

**(ギュレチ)** 私は宗教と文化の関係を、パソコン用語に換えて説明したいと思います。基本的に私の考えでは、神が人間に処方せんとして、ガイドラインとして、ライフガイドとしてくださったものを宗教と位置づけます。コンピューターの用語に置き換えますと、それが基本OSであります。Windows、AppleあるいはLinux等、いろいろありますけれども、Windowsを例に取りましょう。

最初の人間であったアダムに送られたのはWindowsの1.1でありました。その後、いろいろな預言者を神が時々お送りになった。例えば、その中にノアという預言者がいらっしや、Windows2を持ってきたとしましょう。その後、アブラハムが来て、Windows3.0になった。その後、また預言者モーゼが来てWindows95を持ってきました。時代とともに人間の情報の蓄積レベルが上がっていますので、そのライフガイドの説明もどんどん詳細にわたるようになっています。その後、預言者のキリストが送られました。そのほかにもたく

さんの預言者が来ているのですけれども、イスラームでは、今まで申し上げたような預言者を全部信仰しなければならないのです。

イスラームの歴史は決してムハンマドと共に始まっているのではなく、最初の人間だったアダムから始まっているというのがイスラームの基本的な考え方です。イスラーム教とキリスト教は相反するものではない。ユダヤ教は、けんか相手ではなくて、人々の名前まで共通している。アブラハムを、イスラームではイブラヒムと言い、イザクをイスハクと言う。キリストと共に送られたのは、例えばWindowsの2000版であるとしましょう。最後の預言者として送られたのはムハンマドであって、それがWindowsのXPであると。最後のバージョンで書きとめられて、保存版も残されて、預言者が伝えたとおり、もう一文字も変わらない。もう焼き付けられているからなくなることもない。たくさんの人も覚えている。その後は、預言者が送られる必要もなくなった。その最後の預言者としてはムハンマドである。これがいわゆる宗教であるわけです。

では、これとカルチャーはどういう関係でしょう。カルチャーの定義はまだあいまいで、いろいろ先生方の間で議論されているけれども、元々キリスト教的な用語です。基本OSとうまくやっていくソフト、例えば、Office、WordもExcelもPowerPointも、あるいはいろいろなゲームソフトも入って、それがカルチャーです。基本OSとうまくやっていくものはうまくやっていくのですけれども、基本OSとうまくやらないソフトも作られるのです。それがいわゆるウイルスというものです。

私は宗教と文化の関係をそういうふうに考えているのですけれども、こう考えると分かりやすいのではないのでしょうか。ほかの宗教と宗教観の関係も、このような歴史的な順で考えると、大体そのようなものではないかなという気がしますが、いかがでしょうか。

**(島藺)** 何となく、私は自分自身がウイルスだらけの

ような気がしてちょっと心配になってきました (笑)。

(ゾントーク) 今の例はすごく分かりやすいと思いました。ビル・ゲイツの商売方法も1つの宗教かもしれません (笑)。ただ、XPの後で何が来るか。一番最後に教えてもらった教えはXP。そしてWindowsにはいろいろなバグが入っているのです。神の万能説はどうなるのかなと思いました。

私は別の例を挙げて宗教と文化の関係を話そうと思います。ドイツでは今年、サッカーのワールドカップがあります。この間、ドイツのキリスト教について話して欲しいという依頼がありました。でも、学生はみんなサッカーフィーバーです。ドイツと聞くとサッカーばかりを考えている。では、ドイツ教会とサッカーについて話しましょうと、半分冗談で言いました。

そこで、調べたてみたら、ドイツのキリスト教会がサッカーのイベントに乗じていろいろな活動をするらしいのです。聖職者がいろいろな意見をメディアに対して言っています。「サッカーは大事だ」とか、「でも、サッカーは文化だよ。宗教と間違っではいけないよ」とか、「人々は、宗教的なニーズに対して、サッカーの中に答えを探している」とか。単純に考えれば、「文化のサッカー」と「宗教のキリスト教」はどう違うかということですが、教会の方から「サッカーは宗教じゃないよ、それは文化だよ」という言い方は、ある意味で宗教が本来、文化も担っている役割を果たしているということに基づいているのではないかと思います。つまり、宗教には、人が集まって、一致して、一緒にいる、共に居るということを神秘的に感じさせる役割がありました。サッカーを初め、今、すごく流行っている文化には、そういう点があります。大衆文化には、同じ目的で同じ意識を持って一緒にいる、今に共に居る、ということを経験する側面が強いのです。その点で、流行文化と宗教は共通なのではないかと私は思います。

(島藺) 別の問題に移ります。自分と宗教と日本の

関係について話していただいたときに、何人かの方が宗教の持つ社会的な役割について知りたいというお話がありました。しかし、別の見方では、宗教が余りに政治や社会にかかわり過ぎると、人の自由は守られるだろうかという問題もあると思います。これは、「政教分離」ということともかかわりがありますが、関連した質問を幾つかいただいています。

足立さんからは「政教分離ということが多くの先進国で認められているけれど、イスラーム圏や他の発展途上国ではそうっていない。しかし、政教分離が強すぎると、『社会に口を出すな』』という話になる。宗教には政治的な役割がなくていいのか」という質問です。ランジャンナさんが言われたことですが、宗教が社会問題にかかわるということは、政治的にも発言をするという意味を持ってくるのではないかと思います。関連したことで、許雷さんから、「日本人はいつから無宗教になりましたか」という質問もあります。

日本は第二次世界大戦後に政教分離を徹底してやった。国家神道をやめ、信教の自由を確立した。取り分け学校において宗教を全部排除したという問題があります。ですから、これは宗教教育の問題ともかかわってきます。ある意味では、政教分離を徹底すると、日本みたいなパターンになるということです。そして、日本人の感覚からすると、イスラーム世界では政教分離ができていないのではないかという見方がある。この問題をどういうふうに考えていったらいいのか。日本も困ったものだけど、日本から見ると、「もう少し宗教はおとなしくして欲しい」という見方もある。その辺のところを、それぞれの方にお話をいただきたいと思います。

(ギュレチ) 政教分離がイスラーム圏では進んでいないのではないかとのご指摘なのですが、それでも、「だから何だ。進まなくて何が悪い。あるいは、進むべきだったのか。あるいは、『政』と『教』が一緒になった問題はどこで起きたのか」ということ

を考えてもらいたいのです。

イスラームでは、聖職者クラスというのは存在しないのです。教会というピラミッド型の組織もありません。教会が土地を持つ。権力を持つ。国の王に指図をする。そういう形態はイスラームになかったのです。そういう歴史はありません。その歴史は、ヨーロッパにありました。ヨーロッパの教会が力をつけて土地も持って、国の王に指図するほど権力を伸ばしたのです。それに対して、ヨーロッパの市民が、「これではやっていけない」ということで、教会の権力を縮小させる運動に打って出た。その折り合いをつける形でいわゆる政教分離の原則ができたのです。

政教分離の話は、西洋化と共にイスラーム圏に輸出されてきましたが、ヨーロッパの政教分離とイスラーム圏の政教分離は意味が違うのです。イスラーム圏での政教分離というのは、国家がイスラームの影響を排除するための原則になっているのです。例えば、服装に対しても口を出すし、家庭生活においても口を出すし、教育においても口を出します。トルコでは、今でも帽子をかぶることが禁じられています。スカーフをかぶることも禁じられています。人がかぶりたいというのに禁じられています。あるいは、私が自分の子供に聖書を教えたいのに、14歳になるまでは教えることはできない。これが、いわゆるイスラーム圏でいう政教分離です。「自由を縛る」という言葉に代えてもいいようなものになっています。

政教分離という言葉を一枚岩のように扱って、何か普遍的な価値観であるかのように錯覚をして、合うところと合わないところを順位づけるという考え方は、やめていただきたいと思っています。その言葉が発祥した所、そこでの問題点、その歴史的な過程を持たない国々にまで当てはめないで欲しいと申し上げたいです。ごめんなさい、ちょっと強すぎたでしょうか。

(島藺) 大丈夫、大丈夫、そんなことはありません。また後で、ご意見があればフロアの方からも出して

いただきましょう。政教分離というのは、欧米的に言うとキリスト教の教会と国家の分離なのですが、そもそもイスラームには教会なんてないじゃないかという議論もあるのですね。そういうことを踏まえておっしゃったと思います。ミラさんどうですか。

(ゾンターク) ヨーロッパの国々では、政教分離が憲法に書いてありますが、実際には、例えばキリスト教会が政府と一緒に学校の初級教育を行っていると、それほど区別されていないのです。きれいに区別されているわけではないのです。日本におけるキリスト教会は、よく政教分離を唱えています。例えば、靖国問題も政教分離の問題として扱っています。私はクリスチャンですけれども、これは政教分離の問題ではなくて、そこに犯罪人も祭られているということが問題だと私は思っています。日本の政教分離の問題を見ると、それはただの政教分離ではなくて、個人用の宗教と社会用の宗教の分離ではないかと感じます。つまり、政教分離を唱えながら、宗教は飽くまで個人のものだと主張して、社会人としての個人には宗教上の決定権がないみたいです。それはおかしいと思います。つまり、個人が自分の確信をもって、その確信に基づいて社会に出ているような活動をするのに、日本では政教分離の問題の下に、自分の確信を自分の中に閉じ込めて、社会活動とは関係を断ち切ります。日本の社会活動は、いわゆる社会全体の思考でやらなくてはならないという動きがあります。

(島藺) 今日は靖国問題まで話がいくのだろうと準備をしていましたが、國學院大學のヘイヴンズさんに気をつけて発言していただきましょう。

(ヘイヴンズ) 私は異端者ですからご心配なく(笑)。私は逆に、1つの宗教施設としてみんな平等に亡くなった人を祭りたいということがあれば、A級戦犯が合祀されていてもいいと思います。私が問題として見るのは、やはり政教分離の面です。

靖国神社とアメリカのアーリントン国立墓地が同じようなものではないかとよくいわれるのですが、私の目から見れば全く違います。アーリントンは、明らかに政府の軍事施設で、陸軍が経営しています。そして、看板には「アメリカの最も聖なる Shrine (霊場)」と書いてありますが、それは宗教施設という意味ではなくて、非常に広い意味での Shrine、つまり「大事なもの」がここにあるよという印象を与える言葉です。そして、アーリントン墓地における礼拝の仕方は、それぞれの墓石に刻まれている20以上の独特な宗教の象徴によって分かります。仏教、イスラーム教、キリスト教、日本の天理教、生長の家まであるのです。そして、だれでも、一般人でもそこに入って自分の宗教のパターンで礼拝することができます。儀式をすることもできます。申し込めば、大きな組織化された礼拝もできます。

それは靖国では考えられないことだと思います。別の宗教、クリスチャンがそこに入って大きな礼拝式を行うとか、あるいは、仏教やイスラーム教の人々が靖国の中でその宗教の礼拝をすることは不可能だと思います。ですから、千鳥ヶ淵にある無宗教の国立の戦没者慰霊施設の役割を強化することが唯一の解決策ではないかと私は思っています。

もっと広い意味での政教分離の問題を考えますと、セリムさんが言ったように「だから何」と、私も思います。それぞれの歴史的な事情も考えなければならぬと私も思います。ヨーロッパでプロテスタントの改革があったとき、宗教戦争が激しく殺戮が何百年も続きました。そのあげくの対策として、その殺戮をやめさせるために、宗教から暴力的な手段を取り上げ、それを全部世俗的な政治に与えるという手段を執らざるをえなかったといわれています。そのために、ヨーロッパには、いわゆる多様主義的な国ができ、その超宗教的な手段として、あるいは価値観として、憲法が作られました。私の理解では、イスラーム諸国では、その超宗教的な機能はコーランが果たすと思います。それぞれの文明や文化への対応の仕方は違うのですけれども、正義のあ

る制度をみんなが目指しているのではないかと思います。

(ムコパディヤーヤ) ある国が政教分離を選ぶか選ばないかは、その国の歴史を見ていかないと全く分からないと思います。例えば、日本が本当に政教分離をしたのは戦後ですけれども、明治憲法の中にも信仰の自由がありました。国家神道を非宗教とか超宗教的な存在にしなければならなかったことも、ある意味で政教分離に対する配慮があったといわれています。あらゆる宗教を超えるものがないと国作りが非常に難しくなるということです。インドの場合も同じなのです。secularism とか世俗化は宗教を否定しているわけではなくて、すべての宗教に対する配慮から、secularism を主張している。つまり、国が1つの宗教に加担してしまうと、マイノリティたちの宗教はどう守っていくかという問題が必ず生じます。マイノリティたちの宗教の権利を考えて、secular 国家になるのです。

日本では、戦前に新宗教運動が弾圧を受けました。だから、靖国法案に新宗教の団体から一番大きな声で反対が出ています。「法案が成立したら、私たちの信仰の自由はどうなりますか」という問題です。イスラーム国家の中で、マイノリティ、非イスラームの人たちの信仰の自由をどう考えているかよく分かりませんが、無宗教と世俗化国家と政教分離は関連している概念なのですけれども、ある意味で分けて考える必要もあります。もっと議論していかなければならない問題だと思います。

(島薺) トルコ、ドイツ、アメリカ、インドの視点から政教分離についてお話いただきました。セリムさんは、広くイスラームのことを配慮してお話になりました。ドイツとアメリカは同じ西洋ということになりますが、ドイツの方がずっとキリスト教国家的です。アメリカもキリスト教国家ですが、国是に政教分離が入っています。そして、インドは、ヒンドゥーとイスラームの共存が大変難しい国です。そういう背景があるわけで、このことだけでも

数日議論しても面白いと思います。そこから、日本のことを考え直す。今、それができるようになってきたということです。こういう議論を、こういう文化背景を持った方から、こういうふうに伺えるというのは、本当に新しいことで、日本人が日本の宗教史や政治制度を考え直すことができるとてもいい時代になったと思います。

少しここでフロアの方にご発言をいただきたいと思います。

**(岸本)** 靖国問題に関して申し上げたいことがございます。私の出身は職業軍人の家だったので、靖国のことを91歳になる父と話すことがございます。彼が唯一申すことは、靖国神社というのは戦場で亡くなった方たちのためにできた施設であるということです。戦場で亡くなった方を祭るところであって、神道が日本の国教であったかとか、日本人がどういう宗教観を持っていたかとかが問題なのではない。そういうことが最近になっていいかげんになってしまったかということをしみじみ感じるのをございます。お正月には神事に随分参加いたしましたし、結婚式も神道が多いですね。お寺の友達の結婚式に参加したことがあります。葬式もいろいろな宗教がありますが、靖国問題はただ1つ、戦場で亡くなった方を祭る所だということです。1970年代でしょうか、どの政治家の方かは知りませんが間違いを犯しました。戦場で亡くない方を祭ってしまった。その方が、戦争でどれぐらい罪があるかどうかということが問題なのではありません。東京裁判の問題がありますが、その方を個人的に尊敬する人がいてもいいわけです。家族の方もいらっしゃいます。しかし、その方を大事に扱いたいのであれば、決して靖国で祭ってはいけないわけです。戦場で亡くなった方ではありませんから。私は父に、そういうことを、昔の軍人の方々がしっかり説明する義務があるのではないかと、時々申すのですが、なかなか軍人の組織の中も難しいものがあるようです。これはやはり、きちんと中立の立場の方が説明して、その方が亡くなっ

た直後にきちんとしておくべきだったことを、後からごしゃごしゃといじった結果だと私は思っております。是非皆様に、靖国問題は、宗教とは全く関係ないところで起こったものであるということをご理解いただきたいと思います。

**(李鋼哲)** 少し前に「日本教」という言い方がありました。日本人が無意識のうちに信仰していることという意味で、その一例として、「水と安全はただだ」といわれていました。ところが、オウム事件以降、安全はただではなくなりました。学校でも危ない。皆さんペットボトルの水を持っていますけれども、20年前には、水は買うものではなかった。今、そういうものに対しても、お金を出すようになり、「日本教」が変わり始めました。現在、日本には、いろいろな宗教がありますけれども、大体皆共通しているのは、「命が大事だ」ということを強調していることです。「命大事教」が現在の日本の宗教の基盤にあるようなのですが、その日本で年間約3万人以上の方が自殺している。日本人がこんなに自殺するのは、どういう背景があるのか。それに対して宗教は何ができるのか。また、それぞれのお国では自殺に対してどういうふうを考えていらっしゃるのか。その辺をお聞きしたいです。

**(増戸)** 会社員ですが、ネットでこのフォーラムのことを見つけ、元々興味があったことにびっくりだったので、面白く拝聴させていただいています。私は、外資系の会社に勤めているので、アメリカの方とかヨーロッパ、アジアの方と一緒に仕事をすることがあり、食事の時などに、宗教的なことも話題に上ることがあります。「あなたは何教？」と聞かれると、説明ができないのです。私自身は、家は仏教で、近所の神社にお参りし、学校はクリスチャンだったという、一般的な日本人のタイプです(笑)。日本人はそれが多いいと思いますけれども、「日本人の宗教ってどういう感じですか」と聞かれたときに、多くの国の方に納得してもらえるいい説明方法があったら教えてください(笑)。

(島菌) では、最後に、今の3つのご発言に関連して、また、今までの議論の中で言い残したことも含めて、パネリストの皆さんにご発言をいただきます。

(ゾンターク) マイケル・ムーアが監督した「Bowling for Columbine」という有名な映画があります。2年前、映画館でやっていました。その映画の中で、1年間にアメリカ人が他者をガンで殺した数、カナダ人が他者を殺した数、そして、日本の数が出てきました。日本の数がすごく少ない。アメリカは3万人ぐらいだったと思うのですが、日本の方は1000人ぐらいでした。その時、私がすぐ思ったのは、日本で自殺する人はどうですかということでした。3万人ぐらいが毎年自殺しますが、だれがその人を自殺に導くのでしょうか。私は当時、宗教と関連させて考えませんでしたでしたが、日本ではガンは余り使わないけれど、その社会状況の中で自殺が必要だった人が、アメリカの殺人数と同じぐらいにいるのは、何かある意味があるのではないかと思います。答えにはなっていないと思いますが。



(ギュレチ) 3つのご質問に移る前に、ヒョンさんに一言。これから、非常に宗教のことを説明しにくい時代になってくると思います。宗教のことに興味を持つ人に対しては説明できるのですけれども、そうではない環境ではどうするのかということですよ。自分が説明できるか、説明できないかは心配しないことです。自分が蜜のもとを出せる花になることです。いろいろな蜂が飛んでいますから、その蜂には適切な蜜のもとを出せること、そのことに

尽きるのかなと思います。私は、決して商業をやっているわけではありませんから、いかに広告すればこの人を説得できるかということは全然気にしない。私はこういうふう信じています。これが正しいと思います。あなたがもしそういうふう考えるならば、結果はこういうふうなことになるかと説明します。そのことだけです。その人が受け入れるか受け入れないかはその人の判断の自由です。

予言者ムハンマドがある日、非常に悩んでいました。「私が幾ら説明しても、親族でさえ信仰してくれないのではないかと。すると、クルアーンの一節が下るのです。「ムハンマドよ、あなたが悩

むことはない。あなたの役割は人を信仰させることではない。人の心を変えるのは神である。あなたの役割は、ただただ御使いとしてあなたに伝えられたことを人々に伝えることである」。基本的はこれです。人が受け入れるか、受け入れないかは、

決して気にはしない。受け入れたらそれでいいし、受け入れなかったらそれでいい。私の役割は説明することだけで、それで褒賞をもらえるのですから幸せです。その褒賞は神がくださいますから。そういうふう考えて活動をすればいいと、少なくとも自分は考えています。

関連して、ご自分は何教かということですが、基本的には、宗教を持つ人から見て、無宗教の人というのは秩序のない人です。要するに、どう動くか分からない。私は〇〇教ですと言うと、相手は「この人はこの範囲からこの範囲まで動ける人なのだ」と予測がつくわけですから、宗教熱心な人あ

るいは宗教を持つ人に対して、「私は無宗教徒です」と言うより、その場しのぎでも、「私は仏教です」「私は木を信じる宗教です」「私は川を信じる宗教です」と何か言った方が、ビジネスを進める上で、その後の交流の上で役に立つのではないかと思います。宗教を持つ人に対して、「私は無宗教です」と言ってしまうと、まず規範を持っていない人として見られてしまう。安心できない人であると思われてしまう。それがあっていいのではないかと思います。

日本の皆さんに対する私個人の評価ですが、日本の皆さんは「日本人教」だと思います。日本人の条件にあてはまらないと何かだらしく見られる。ですから「私はジャパン教です」と言ってもいいかと思っています。それは何だと言われたら、説明すればいいでしょう。

最後に、自殺に関して。新幹線の中の字幕ニュースで、今国会に自殺対策法が提案されるということが流れていたもので、とうとう動いたのかと思ったのですが、中身はどうなるのか興味があります。何をもちて人に自殺をやめさせるのでしょうか。お金に困って自殺する人にはお金をくれるのか。あるいは、会社での立場が悪くなった人には、国や自治体が間に入って、「いやいやちょっと待って、あなたを課長から部長にするからそれでやめなさい」と言うのか。本当にこれほど環境が整って、これほど礼儀正しい人たちが住んでいるこのきれいな日本、世界には例がないと思うのです。別におせじを言っているわけではなくて、来た当時からそういうふうになっているのですけれども、その国の中でこれほど多くの方が自殺しているというのは不思議で仕方ないのです。なぜ人たちがこんなに死んでいかなければならないのだろうか。それも、自らの命を絶つことで。

その意味ではイスラームは治療薬かなと思います。イスラームでは、自殺をするということは永遠に地獄に落ちることになるのです。ですから、決して自殺はしない。人間の能力というのは無限のものではありません。限られたものであります。最大

に努力して、かなえるものはかなえて、かなわないものに対しては、神が望まなかったから私もできなかったというふうに自分で納得する。最大限に努力をしながら、最終的にはかなわなかったときには、もう神が望まなかったからだと。会社で要求されたことができなかった。しかし、私は一生懸命努力したと自分で信じていますし、周りから見てもあいつはよく頑張っていたと言われる。ただ、できなかった。能力がなかったからできなかった。神がそういう恵みをくれなかったから。それでいいのではないか。頑張ったことであなたが褒賞を得たので、それで満足と。

ですから、「インシャラー」という言葉を、私は自殺問題を抱えている日本にお勧めしたいと思います。「神の望むところ」ですね。望まなかったからできなかった。それで納得、では、次に行きましょうと。毎日新しい日でありまして、一人の人間は1つの世界であります。私たち自身も、実際には、瞬間的に亡くなって、瞬間的に生きている。よみがえっているわけです。肉体にはなっているのですけれども、実際にこの肉体とこの机には、基本構造として何の差もないのです。組み合わせが違って機になって、組み合わせが違ってこの肉になっています。目は脂肪の固まりなのですけれども、見ることができます。死ぬ人には、見ることはできません。そういう人と会うこと、ものを見て楽しむこと、そういうこともできません。命が大切だという「命教」といういい言葉も出ましたが、是非とも命の大切さを、だれよりも、どの国のどの人よりも、イスラーム教徒よりも申し上げますけれども、よく観察して感じ取る日本の方々、その美しい感覚を生かして、是非ともこの自殺問題も解決して欲しいと思います。

古い日本の文化の中に、自殺が美しいというふうに使われているとも耳にしたことがあるのですけれども、ある意味で、それが格好いいのかもしれませんが、生きることはなによりも格好いいものでありますので、その格好よさをもう一度見直して欲しいと思います。

(ヘイヴンズ) 確かに自分は無宗教だと答えるよりも、具体的な答えを出した方が、ビジネスの面ではいいかもしれないけれども、例えば「仏教です」と答えると、今度は「仏教は何を信じていますか」と聞かれますから、やはり仏教についての知識を身に付けていないと困りますね。神道も同様ですが、結局、私には答えられない。非常に人類学的な問題になってしまうので、短時間では答えられません。

「どうやって自殺をやめさせるか」という問題を考えると、残念ながら「後の祭り」という感じがします。何年前かにテレビの討論会で「いじめ問題」を討論したのですが、「いじめの問題にどう対応すべきか」という問いに、ある人が「もっと個人主義的な考え方を教えなければならない」と答えたのです。しかし個人主義を「教える」ことはできないのではないかと思います。それは社会から生まれてくる1つの資質だと思うのです。文化の1つだと思います。同様に、十代の人に対して、急に、「自殺するな」と言っても、もう遅いです。もっと若いときから、「人間性はどこにあるか、人間性は何であるか」ということを考えさせなければいけない。だから教育の問題でもあります。日本は教育の面で、線路が1つしかないという印象を受けます。間違いを体験できるところがなかなかないのです。私のアメリカの経験では、教育という「電車」に乗って、どこかで降りたいのならば降りてもいい。また後で再び乗ることは比較的簡単です。日本の教育制度では、始まりから終点までつながっていて、そこから落ちると、もう一度乗ることが非常に難しい。軌道修正が許されないのです、若者が憂鬱になるのではないかという気がします。もっと失敗してもいいから、いろいろ試してみなさいという態度を執ればいいと私は思います。

(ムコパディヤーヤ) 日本人が日本の宗教をどう説明するかということですが、私は宗教学のゼミで、学生に「あなたの宗教は何ですか」と必ず聞

きます。半数以上の学生にとっては、初めて受けた質問でした(笑)。今はもう去年の学生から「必ずこの質問が出る」と伝わっているので、あらかじめ準備してくる学生もいますが(笑)。最初に聞いたとき、学生が戸惑っているのです、「なぜ皆さん、戸惑うの」と聞いたら、「答えが1つではない」と。アジアの国々には西洋の宗教の概念が非常に強く入ってきているから、宗教を聞かれた場合、答えを1つにしなければならない。例えば、キリスト教とか仏教とか、あるいはイスラーム教とか。でも、日本人はそういう1つを答えられない。それが1つの大きな問題です。相手がもしアメリカ人などで、1つしか答えを期待していないときには、いろいろな宗教を信じていることはおかしくないかと言われます。そう言われると「なるほど」と思ってしまう、戸惑ってしまって、自分を無宗教と言ってしまう。本当は無宗教より多宗教の方なのです。いろいろな宗教を同時に信じている。それを「宗教」という言葉で説明できるかできないか。でも、そうだったら、問題は日本人の宗教観ではなくて、「宗教」という言葉にあると思います。宗教という言葉は1つの宗教だけを示す概念でしょうか。あるいは、様々な宗教を信じている人が、「私は仏教と神道、両方信じていますよ」「私は仏教とキリスト教を同時に信じていますよ」と答えられるような概念として宗教を見ることができないことが1つの問題点になると思います。

靖国問題は、宗教問題ではなく、「戦場で亡くなった人のみが祭られるという原則を守らなかったこと」と言われましたが、祭られていること自体が宗教とつながっている。だから、そこに祭られているとか、どういう方針で祭られているかというところが、宗教的な行為になっていると、私には見えます。靖国に祭られている人たちの多くは、どこかの仏教の檀家にも入っているでしょう。例えば、東海地方出身のA級戦犯の人が何人かいますが、8月15日には、その仏教のお寺でその人たちを祭る式があります。お寺側は、私たちに、「平和の日」と説明し

ます。「うちの檀家の方ですから、私たちが当然祭らなければならない。A級戦犯になったかならなかったかは私たちとは関係ない」。だから、A級戦犯の問題は、祭りをする段階に来ると、宗教の問題をぬいて考えることはできないと思います。

最後に、自殺の問題についてコメントします。先ほど、イスラーム教の中で自殺は非常に身勝手な行為といわれましたが、場合によって、最初の暴力の質問につながるけれども、自分を殺すことが、身勝手な行為というよりも美化されているところもあります。これは、日本にもあてはまることです。昨日私は大河ドラマを見ました。豊臣秀吉の奥さんが白い服で自殺を図ろうとしています。豊臣秀吉が入ってくると、「では、先に参らせていただきます」「あなた、どこに行くの？」「浄土に行きます」「えっ、なぜ浄土に行くの？」。しかし、彼が怒っているのは、「あなたはこんなにりっぱな人の奥さんなのに、なぜこんな古い服で行くの。もっと立派な服を着ればいいじゃない」ということなのです。自殺するから、白い服に着替えていたのですが。

日本には、「自殺して浄土に行きます」という考え方があります。日本人の中では、死ぬことには解放感がある。解放される。死後の世界は、どこの世界よりよっぽどいい世界。そういう宗教観と結びついていて、ある意味で、自殺を正当化させてしまうのではないのでしょうか。一番有名な事例として、江戸時代におきた細川ガラシャの話があります。彼女はキリスト教に改宗したけれども、ご主人が亡くなる前に「もし私が死んだら、あなたは人質にならずに自殺してください」と言った。彼女はキリスト教に改宗したから自殺はできないので部下に殺してもらったのです。そのような伝説になっているのです。ある意味で文明の衝突です。自分はキリスト教を信じているけれども、日本の文化の中では、自殺すべき立場にもあった。日本人が死に対してどういう考え方を持っているか、そこから自殺の問題を考えざるをえないと思います。

(島藺) とてもいいコメントをたくさんいただきました。まだまだ話を続けたいですが、予定の時間が来てしまいました。質問をいただいた方に対しても、十分にご紹介できなかったかもしれません。私がうまく処理できなかったことはおわびしたいと思います。しかし、3時間半のフォーラムですけれども、とてもいい、深い時を過ごせたように私は感じております。パネリストの4人の方々、それから、ヒョンさんも今日は準パネリストだったのですけれども、お礼の拍手をしたいと思います。どうもありがとうございました(拍手)。そして、私は、参加者の一部として、これを企画してくださったSGRAの皆さんにお礼を申し上げます。とてもいい、充実した企画、ありがとうございました。

## 講師略歴

### ■ 島 蘭 進 (しまぞの・すすむ)

1948年、東京生まれ。東京大学大学院で宗教学を学ぶ。近代日本宗教史、比較宗教運動論を研究してきた。特に日本の19世紀から現在までの、いわゆる新宗教の専門家と見られている。新宗教は主に神道や仏教や民俗宗教 (folk religion) の伝統を引き継ぎながら、急速に発展したもので、創価学会を初め、まことに数が多い。アメリカ合衆国やアジア諸国の宗教についても関心をもって、日本との比較を心がけている。書物や文書資料による研究と共に、宗教集団のフィールドワークやインタビュー調査を行う。その後、宗教文化が現代の政治的、社会的、倫理的争点にどう関わっているかといった問題にも関心を広げている。

日本の新宗教を世界の宗教史に位置づけようとした『現代救済宗教論』(青弓社、1992)、現代の日本とアメリカのニューエイジ運動について論じた『精神世界のゆくえ』(東京堂出版、1996)、オウム真理教について論じた『現代宗教の可能性』(岩波書店、1997)、新宗教教団、修養団捧誠会の教祖の伝記的研究である『時代のなかの新宗教』(弘文堂、1999)、幸福の科学等70年代以降の日本の宗教運動・宗教意識の特徴を考察した『ポストモダンの新宗教』(東京堂出版、2001)、近代日本の代替療法や日本的な心理療法について考察した『〈癒す知〉の系譜』(吉川弘文館、2003)、主な論文の英語版を集めた From Salvation to Spirituality (Trans Pacific Press, 2004)、日本の生命倫理の審議について考察した『いのちの始まりの生命倫理』(春秋社、2006)などの著書がある。

筑波大学研究員、東京外国語大学助教授を経て、東京大学教授(宗教学専攻)。カリフォルニア大学バークレイ校留学(1984-85年)。シカゴ大学客員教授(1996年)。1997年には、フランス社会科学高等研究院(Ecole des Hautes Etudes en Science Sociales)の招聘教授としてパリに、2000年にはチュービンゲン大学の客員教授としてそれぞれ1ヶ月滞在した。

以下のブログをご覧ください。最近の関心事が分かります。

<http://free.jinbunshakai.net/shimazono/>

### ■ ノルマン・ヘイヴンズ (Norman HAVENS)

1950年、アメリカ生まれ。オレゴン大学で日本語と東洋学を専攻して卒業した後、アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター〔東京〕で日本語を、また1977-81年、(米)プリンストン大学大学院宗教研究部で宗教学を学ぶ。1981年より日本に滞在。東京大学にて国費留学生として宗教学を研究後、國學院大學日本文化研究所の嘱託・専任研究員を経て、2002年に同大学新設の神道文化学部に移籍し現在に至る。日本の宗教史、特に近世の民間信仰、伊勢信仰、お陰参りなどを研究しながら、神道文化学部では世界宗教文化論などを担当する。國學院大學21世紀COE主催の『神道事典』の英訳・オンライン化のプロジェクトで主要翻訳者・編集者を務める。主要著作に、「伊勢大神宮神異記」、「伊勢大神宮続神異記」の翻訳、Paul L. Swanson 編「Nanzan Guide to Japanese Religions (2005年)」の一章、「Shinto (神道)」など。

## ■ ランジャナ・ムコパディヤーヤ (Ranjana MUKHOPADHYAYA)

1971年、インド生まれ。1991年、デリー大学ミランダハウス・カレッジ社会学部卒業、1993年、デリー大学大学院デリー・スクール・オブ・エコノミクス(経済学研究科)社会学修士課程修了。デリー大学大学院中国日本研究科 M.Phil. 課程では日本研究に着手、1997年、同課程修了、来日。1999年、東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野博士課程入学、2003年、文学博士取得。現在、名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授

主要著作に、『日本における社会参加仏教—法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理—』(東信堂、2005年)、「立正佼成会の教義における根本仏教及び法華経の一乗思想の融合とその理念の社会的実践」(『中央学術研究所紀要』第33号、2004年)、「仏教と近代化—日本における「社会参加仏教」の展開—」(『近代仏教』第10号(日本近代仏教学会)2003年)、“Reiyu-kai” “Rissho Kosei-kai” “Kokuchu-kai” in Religions of the World: A Comprehensive Encyclopedia of Beliefs and Practices, Vol.3 (General Editors: J. Gordon Melton and Martin Baumann) ABC-CLIO, Santa Barbara, California 2002、“The Brighter Society Movement of Rissho Kosei kai – A New Application of the Bodhisattva Way.” Asian Cultural Studies, No.27, Institute of Asian Cultural Studies, International Christian University, 2001、「法音寺と昭徳会—社会参加仏教の一例として—」『東京大学宗教学年報』XVIII、東京大学宗教学研究室、2000年、“Relationship between Religion and the State in Modern Japan” China Report Vol.33, No.4, Oct-Dec 1997.

## ■ セリム・ユジェル・ギュレチ (Selim Yucel GULEC)

1965年トルコ・トカット生まれ。1984年イスタンブール、マルマラ大学経済行政学部行政学科卒業。イスタンブール大学大学院政治学部EC統合関係学科。1990年日本政府文部省奨学金を受け来日。1993年島根大学大学院法学研究科修士。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程終了。1996年度渥美奨学生。1997年在日トルコ大使館勤務。2000年トルコ共和国宗務庁付属東京ジャーミイ・トルコ文化センター理事・副代表。2003年より、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科博士課程イスラーム地域研究。2005年よりイスラーム文化センター代表。

主要著作に、「トルコの現在の政治状況とイスラーム原理主義」世界秩序研究会編『トルコ・アルジェリアの政治・経済Ⅱ』世界経済情報サービス(ワイス)出版、1995年3月。「現在トルコにおける地方自治の現状とその変動について、地方自治制度と地方選挙」『中東研究』1995年10月号。「イスラームから見た新技術」『第1回国際シンポジウム イスラームとIT～イスラーム世界におけるITの展開とその意義～』イスラームとIT実行委員会(早稲田大学)出版、2001年。「イスラームはどういう宗教か」浄土真宗本願寺派宗会事務局出版、2002年。『幸福への道 イスラーム』(訳)トルコ共和国総理府宗務庁出版、2002年

## ■ ミラ・ゾンターク (Mira SONNTAG)

1971年(旧東)ドイツ生まれ。1997年、ベルリン・フンボルト大学大学院人文社会学部の修士課程終了(メジャー:日本学、マイナー:神学とロシア語)。1996年から2年間ベルリン・フンボルト大学の日本文化センターに就職。1998年、東京大学法学部社会科学研究所に研究生として来日。2000年、東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教学史学専門分野博士課程入学、2005年、博士課程終了。現在、東京の富坂キリスト教センターの研究主事として「日本の国公立学校における宗教教育」の可能性と必要性を学際的に検討する研究会を実行中。

主な研究テーマは、1)日本の宗教教育、2)日本のキリスト教教育、3)内村鑑三と無教会運動。それぞれを取り上げた著作は以下のとおり:“The structural limitations of religious education in Japan,” in *Bulletin for the Council of Societies for the Study of Religion* Vol. 34 No. 4 (November, 2005年)、66～69頁。“Christian education at Aishin,” in *The Japan Mission Journal* (Fall, 2005年)、172～190頁。「キリスト再臨運動 -- 近代日本における合理性と救済を巡る言説」、『内村鑑三研究』、第三十八号(2005年)、58～64頁。“Uchimura Kanzô. A Bibliography of Studies and Translations in Western Languages,” in *Japonica Humboldtiana* Bd. 4 (2000), 129-76。「内村鑑三と福沢諭吉 -- その文明論をめぐる」『内村鑑三流域』第一号(2000年)、20～43頁。“Uchimura Kanzô. A Bibliography of Studies and Translations in Western Languages,” in *Japonica Humboldtiana* Bd. 4 (2000), 129-76.

## あとがき

### ランジャナ・ムコパディヤヤー

SGRA「宗教と現代社会」研究チームチーフ

名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授

2006年5月14日（日）午後2時から5時半まで、第23回SGRAフォーラムが東京国際フォーラムにて開催された。今回のフォーラムは、今年新設されたSGRA「現代社会と宗教」研究チームの第1回目のフォーラムであった。近年、原理主義運動、宗教紛争などの宗教を巡る様々な問題が世界各地で発生している一方、ニューエイジ運動やスピリチュアル・ケア活動の興隆にみられるように宗教に癒しを求めている人も少なくない。現代社会及び現代人をよく理解するために「宗教」に対する知識を高める必要があるのではないかという発想からSGRAの新しい研究チームが発足した。当然の関心として挙げられたのが、日本人にとって「宗教」とはどのようなものかという問題だった。日本人は「無宗教」であるのか、「多宗教」であるのか。日本人の宗教観への理解を目指して、当フォーラムのテーマは「日本人と宗教」となった。

東京大学宗教学の島藺進教授が「日本人にとっての『宗教』と『宗教のようなもの』」というテーマの基調講演を行った。島藺家は代々医師であったが、なぜ島藺教授は医学を捨てて宗教学を選んだのかというところから日本人の宗教観について語り始めた。島藺家は浄土宗であるが、お母様がカトリックに信仰したり、教授自身がプロテスタント系の幼稚園に通っていたり、また神道式の葬式に共感するなどのことから指し示すように日本人の宗教観念は包容的で多元的である。日本人は、同時に様々な宗教を信仰しながらも、なぜ「無宗教」だというのか。その説明として、島藺教授は「自然宗教」と「創唱宗教」の概念を紹介した。自然宗教とは、神道、ヒンドゥー教、道教など、創始者を持たない宗教である。創唱宗教は、キリスト教、イスラム教、仏教のように、創始者を持ち、その教説に拠る宗教である。日本の民族宗教（神道）はアニミズムのようなものであり、それが日本人の宗教心の根底をなす。日本人の「無宗教」を課題とした著作として阿満利磨著『日本人はなぜ無宗教なのか』が紹介された。日本人の宗教に対する考え方が学問的に、そして一般的にも注目を浴びるきっかけになったのはオウム事件である。その後、日本の宗教状況に関する多数の図書が刊行された。例として橋本治著『宗教なんかこわくない!』、梅原猛、山折哲雄共著『宗教の自殺—日本人の新しい信仰を求めて』などの書籍が挙げられた。さらに、日本人の宗教観念を表すもう1つの概念は「道」である。神道や道教に「道」の文字が含まれているように日本人にとって宗教は「道」のようなものである。宗教学を研究する者には、茶道、華道などの芸道、剣道、弓道などの武道を学んでいる人が多い。最近では武士道がリバイバルであり、宮本武蔵を主人公とする漫画が大人気になっている。

続いて、日本で宗教学研究に従事している4人の外国人研究者がどのような経緯で宗教・宗教学に関心を持つようになったのか、日本留学のきっかけ、取り分け日本の宗教を研究することに至ったのかという内容の自己紹介を行った。國學院大學神道文化学部助教授のノルマン・ヘィヴンズ氏は、ベトナム戦争の時、アメリカの兵士として沖縄に来て、初めて異文化と触れる機会を得た。それが、日本の宗教や文化に関心を持つきっかけとなった。その後、神道を初め、日本の巡礼、取り分け幕末時代の「お陰参り」、「ええじゃないか」などの日

本宗教の諸相について研究を進めてきた。名古屋市立大学大学院人間文化研究科助教授のランジャン・ムコパディヤーヤ氏（SGRA 研究員）が日本の仏教に関心を持ったきっかけは、インドにおける原理主義問題であった。また、家族が信心深い職業軍人であったことにも影響を受けた。様々な国・文化における宗教状況を比較考察する目的でムコパディヤーヤ氏が宗教学そして日本宗教の研究に着手した。来日以来、日本仏教の社会活動（「社会参加仏教」）に関する研究に取り組んできた。ミラ・ゾンターク氏（SGRA 研究員）は、富坂キリスト教センター研究所において「宗教と教育」という研究を担当している。旧東ドイツに生まれ、19歳の時、ベルリンの壁が破壊し、社会主義体制が終焉に向った際、ゾンターク氏はキリスト教に関心を持ち始めた。また、美術、言語学そして柔道にも関心があったことから、大学で日本学を専攻することにした。最後に、京都のイスラム文化センター代表のセリム・ユジェル・ギュレチ氏（第2期渥美財団奨学生）が湾岸戦争の時、報道機関の人々にイスラムについて質問された際、日本人のイスラムに対する知識の浅さに驚き、日本でイスラムに関する知識を広げることが「天命」として受けとめた。その後、トルコ政府の支援による東京都渋谷区にモスクを建設し、現在は京都でイスラムセンターを設立して活動に励んでいる。

休憩を挟んで、フロアからの質問を踏まえながら、「日本人と宗教」というテーマのパネルディスカッションが行われた。4人の研究者はパネリストを、島園教授はコーディネーターを務めてくださった。最初の質問者は、SGRA 会員の玄承洙氏であった。韓国のキリスト教の家に生まれ、牧師を目指していた玄氏は、ある時期からその宗教に疑問を抱く一方、イスラムに関心を持つようになった。現在東京大学大学院博士課程でチェチェン紛争について研究している玄氏の質問は、「宗教は平和思想を生み出すと思われているが、実際は戦争や暴力の原因ではないでしょうか」というものだった。4人のパネリストがそれぞれの立場から回答した。人類の長い歴史のなか、宗教理念によって正当化された戦争や暴力の事例は少なくない。宗教の重要な役割は社会秩序を維持することであり、そのために権力者による暴力や戦争を正当化してしまう場合がある。近代以降、政教分離によって、戦争が政府側の権力として認められ、平和活動が宗教の領域になったのである。その後、宗教が精神的内面的なものであるのか、社会的なものであるのかということについて意見が交わされた。

次の質問は、今最も注目されている靖国問題に関連するものであった。戦没者の慰霊祭が宗教的行為であるか否かという質問だった。パネリストの答えは、日本の宗教文化においては追悼式や慰霊祭、つまり魂を祭ることが宗教的な行為として認識されている。そして、靖国神社は宗教施設であり、そこで行われる慰霊祭が宗教と無関係であるとはいえない。続いて、「政教分離」がパネルディスカッションの話題となり、各パネリストが、それぞれの国における宗教と国家との関係を巡る諸問題を日本の状況と対比しながら、政教分離の理念を賛否する意見を述べた。

宗教と自殺に関する質問もあった。日本人の自殺率が高いのは宗教と関係があるかという質問だった。その質問に対するパネリストの反応も様々であった。イスラムやキリスト教においては、自殺する人が地獄に落ちるという見方に対して、仏教では、死によってこの苦の世界から解放され浄土に生まれ変わることができるという考え方がある。ここでは、宗教によって「死」に対する考え方が異なっていることを窺うことができた。その関連でパネリストから宗教と道徳についての発言があった。人間の行為が（習慣としても）宗教によって規定されるので、宗教が人々のモラル（道徳観）をどのように育むことができるのか、ということについて真剣に検討する必要がある。

最後に、貿易関係の仕事をしている会社員から「外国人に貴方の宗教は何かと聞かれたら迷ってしまうことがあるので、外国人に日本人の宗教についてどのように説明すれば良いでしょうか」という質問があった。パネリスト側の回答としては、日本で近代以降出現した「宗教」という言葉が、日本の多元的包容的な宗教状況を把握するために必ずしも適切な概念であるとはいえない。日本人の宗教観をより正確に表す概念を模索することは今後の課題であるということだった。この質問が求めていた回答は正に本フォーラムの趣意であった。日本で長く生活し、日本宗教の研究に取り組んでいる外国人研究者たちは、日本の宗教をどう見ているのかという視点から当フォーラムが日本人の宗教観について理解の深めようとしたのである。

(仏教タイムズの記事)



# 関口グローバル研究会

SGRAレポート・バックナンバーのご案内

- No. 0001 設立記念講演録 船橋洋一「21世紀の日本とアジア」2001.1.30 発行
- No. 0002 CISV 国際シンポジウム講演録「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」(今西淳子、高偉俊、F. マキト、金雄熙、李來賛) 2001.1.15 発行
- No. 0003 渥美国際交流奨学財団奨学生集の講演録 畑村洋太郎「技術の創造」2001.3.15 発行
- No. 0004 第1回フォーラム講演録「地球市民への皆さんへ」(関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓) 2001.5.10 発行
- No. 0005 第2回フォーラム講演録「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」(平川均、F. マキト、李鋼哲) 2001.5.10 発行
- No. 0006 投稿 工藤正司「今日の留学」(今西淳子「はじめの一步」) 2001.8.30 発行
- No. 0007 第3回フォーラム講演録「共生時代のエネルギーを考える:ライフスタイルからの工夫」(木村建一、D. バート、高偉俊) 2001.10.10 発行
- No. 0008 第4回フォーラム講演録「IT 教育革命:IT は教育をどう変えるか」(臼井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蔣恵玲、楊接期、李來賛、斎藤信男) 2002.1.20 発行
- No. 0009 第5回フォーラム講演録「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」(ペマ・ギャルポ、林泉忠) 2002.2.28 発行
- No. 0010 第6回フォーラム講演録「日本とイスラーム:文明間の対話のために」(S. ギュレチ、板垣雄三) 2002.6.15 発行
- No. 0011 投稿 金香海「中国はなぜWTOに加盟したのか」2002.7.8 発行
- No. 0012 第7回フォーラム講演録「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」(建石隆太郎、B. ブレンサイン) 2002.10.25 発行
- No. 0013 投稿 F. マキト「経済特区:フィリピンの視点から」2002.12.12 発行
- No. 0014 第8回フォーラム講演録「グローバル化の中の新しい東アジア」+宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション(平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟健軍、B. ヴィリエガス) 日本語版 2003.1.31 発行、韓国語版 2003.3.31 発行、中国語版 2003.5.30 発行、英語版 2003.3.6 発行
- No. 0015 投稿 呉東鎬「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」2003.1.31 発行
- No. 0016 第9回フォーラム講演録「情報化と教育」(苑復傑、遊間和子) 2003.5.30 発行
- No. 0017 第10回フォーラム講演録「21世紀の世界安全保障と東アジア」(白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣) 日本語版 2003.3.30 発行、英語版 2003.6.6 発行
- No. 0018 第11回フォーラム講演録「地球市民研究:国境を越える取り組み」(高橋甫、貫戸朋子) 2003.8.30 発行
- No. 0019 投稿 朴栄濬「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」2003.12.4 発行
- No. 0020 第12回フォーラム講演録「環境問題と国際協力:COP3の目標は実現可能か」(外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊) 2004.3.10 発行
- No. 0021 日韓アジア未来フォーラム「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004.6.30 発行
- No. 0022 「渥美奨学生の集い」講演録「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」(明石康) 2004.4.20 発行
- No. 0023 第13回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきか」(宮島喬、イコ・プラムティオノ) 2004.2.25 発行
- No. 0024 投稿 フスレ「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」2004.10.25 発行
- No. 0025 第14回フォーラム講演録「国境を越える E-Learning」(斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F.マキト、金雄熙) 2005.3.31 発行
- No. 0026 第15回フォーラム講演録「この夏、東京の電気は大丈夫?」(中上英俊、高偉俊) 2005.1.24 発行
- No. 0027 第16回フォーラム講演録「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」(竹田いさみ、R.エルドリッジ、朴栄濬、渡辺剛、伊藤裕子) 2005.7.30 発行
- No. 0028 第17回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきか—地球市民の義務教育—」(宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美) 2005.7.30 発行
- No. 0029 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録「韓流・日流:東アジア地域協力におけるソフトパワー」(李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙) 2005.5.20 発行
- No. 0030 第19回フォーラム講演録「東アジア文化再考:自由と市民社会をキーワードに」(宮崎法子、東島誠) 2005.12.20 発行
- No. 0031 第20回フォーラム講演録「東アジアの経済統合:雁はまだ飛んでいるか」(渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範建亭、白寅秀、エンクバヤル、F. マキト、平川均) 2006.2.20 発行
- No. 0032 第21回フォーラム講演録「日本人は外国人をどう受け入れるべきか—留・学・生—」(横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍) 2006.4.10 発行
- No. 0033 第22回フォーラム講演録「戦後和解プロセスの研究」(小菅信子、李恩民) 2006.7.10 発行

☆ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel:03-3943-7612 Email: sgra-office@aisf.or.jp) へご連絡ください。

# SGRAかわらばん

～無料購読のお誘い～

「SGRAかわらばん」は、SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週2回（火・金）、電子メールで発送いたします。どなたにも無料で購読していただけますので、下記より登録してください。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/sgrakawaraban.htm>

ご登録いただいた方は、SGRAメール会員となり、「会員用」ホームページ（<http://www.aisf.or.jp/sgra/>）から、SGRAかわらばんや、SGRAレポートのバックナンバーをダウンロードしていただくことができます。

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生生活を経て日本の大学院から博士号を取得した研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。

SGRAは2000年7月より活動を続けており、既にフォーラムを25回開催し、レポートを33冊発行してきましたが、より多くの方々にSGRAの活動を知っていただくために、新しく「SGRAかわらばん」の無料電子メール送信を始めることにいたしました。知日派外国人研究者によるネットワーク活動に関心のある方は、是非ご登録いただきますようお願い申し上げます。尚、SGRAの公用語は日本語で、「SGRAかわらばん」は日本語のみで発行いたします。

お問合せは、下記SGRA事務局まで。

SGRA事務局

〒112-0014 文京区関口3-5-8 渥美国際交流奨学財団内

Tel: 03-3943-7612

Fax: 03-3943-1512

e-mail: [sgra-office@aisf.or.jp](mailto:sgra-office@aisf.or.jp)

Homepage: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

SGRAレポート No. 0034

---

第23回SGRAフォーラム

「日本人と宗教：宗教って何なの？」

---

編集・発行 関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8 (財) 渥美国際交流奨学財団内

Tel : 03-3943-7612 Fax : 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール : [sgra-office@aisf.or.jp](mailto:sgra-office@aisf.or.jp)

発行日 : 2006年11月10日

発行責任者 : 今西淳子

印刷 : 藤印刷

---

© 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ね並びに引用の場合はご連絡ください。